

DESTINY PUPIL



アクア
イラスト/まりも

DESTINY PUPIL

目次

序 章	3
第 1 章	18
第 2 章	53
第 3 章	93
第 4 章	108
第 5 章	143
第 6 章	168

序章

ミナキ・フィラデルフィアが八歳の時に家族と共に人間界から幻獣界に移住してから七年が経った。

ミナキは人間界の父であるガザ・フィラデルフィアとおさなじみであるスター・ブロンドに会いたくなり、王室で幻獣界の王であるパトモスと幻獣界の女王であり、母であるゴルティナに、「パトモス王、お母さま、私、お父さまとスターに会いに人間界に行きたい」と言った。

ミナキはガザとゴルティナとの混血児として人間界で生まれた。リディアに住むガザとゴルティナと平穏な暮らしをし、リディアの隣にあるウルに住むスターと遊びながら、成長した。

ミナキが八歳になると、ゴルティナは「幻獣界の女王であることから、幻獣界にいつかは戻らなければならぬ」という思いから、ガザと別れて、ミナキと共に人間界から幻獣界に移住することを決めた。ミナキは幻獣界でパトモスとゴルティナに育てられた。

「ミナキ、人間界に行っても良いぞ」

「人間界はおまえの生まれ故郷だからね」

パトモスとゴルティナは快く承諾した。

4 序章

「パトモス王、お母さま、ありがとう」

ミナキがパトモスとゴルティナに嬉しそうに礼を言うと、ミナキの肩に乗っているリスが嬉しそうに尻尾を振った。

「リス、おまえも嬉しいのね」

リスは人間界でガザとスターに可愛がってもらったので、ミナキと一緒にガザとスターに会いに人間界に行けるのが嬉しかった。

リスは幻獣界の幻獣で、ミナキが幼女期に人間界で幻獣界の幻獣を召喚する魔法、召喚魔法を初めて使えるようになった時に幻獣から人間界に召喚された。ミナキがゴルティナと共に人間界から幻獣界に移住するまで、ミナキいつも一緒に行動して、人間界にいたので、ミナキのパートナーとなった。

「人間界のガザとスターには人間界で世話になったから、宜しく伝えるのよ」

「わかったわ、お母さま」

「今夜は寝室でゆっくり寝て、明日、リスと人間界に行きなさい」

「ええ、パトモス王」

ミナキはリスと王室を出て、寝室に行った。

「リス、明日が楽しみね」

ミナキがリスに話しかけると、リスは楽しみにしているようで、ミナキの肩の上をハイテンシ

5 序章

ヨンで走り回った。

「リス、寝ようか」

寝室のベッドに横たわったミナキは枕元で丸くなるリスに話しかけると、眠くなって、眠りについた。

ミナキとリスが眠りについてしばらくして人間界からミナキを呼びかける聖女の声があった。

「ミナキさま、ミナキさま」

「誰？」

「私はラエティアと申します」

「ラエティア？」

ミナキが目を覚まし、ベッドから起き上がると、目の前にラエティアがいつの間にか立っていた。ミナキはラエティアがなぜ人間界からここに来たのか、不思議に思った。

ラエティアは人間界の亡き聖女ナワクラティスの子孫である。

「私の先祖の聖女ナワクラティスはその昔、人間界を滅ぼそうと企む魔界の魔王ベルゼブルと争いました」

「その昔、人間界と魔界が戦争をしたのね」

「はい」

「争ったのは、ナワクラティスとベルゼブル」

「ナワクラティスが作り出した自然の力を秘めたナチュラルストーン、『火』のロードライトガーネット、『水』のサファイア、『土』のオパール、『風』のエメラルド、『光』のキャッツアイ、『天』のムーンストーン、『気』のパール、『幻』のヒスイと聖剣アドラミティオン、ベルゼブルが作り出した暗黒界の力を秘めたブラックストーン、『闇』の黒真珠、『冥』の黒珊瑚、『邪』のダイヤモンド、『魔』のブラックオパールとベルゼブルの魔剣が激突しました」

「ナワクラティスとベルゼブルが互いに作り出したナチュラルストーンと聖剣アドラミティオン、ブラックストーンとベルゼブルの魔剣」

「ラエティアはナチュラルストーンのひとつである『水』のサファイアをミナキに授けた。

「これを、私に？」

「これだけではありません、神聖の遺産である聖剣アドラミティオンも授けます」

「聖剣アドラミティオンも私に？ ここにはないけど？」

「聖剣アドラミティオンはここにはありません。ナワクラティスが眠るティスにあります。ナワクラティスによって、封印されました。私からナチュラルストーンを授かる者が揃うと、封印を解くことができます」

「そうなのね」

7 序章

「ミナキさま、私はティスにあるナワクラティスの墓と聖剣アドラミティオンを守らなければなりません。私からナチュラルストーンを授かる者が揃いましたら、ティスにお越しください。聖剣アドラミティオンの封印を解いて頂けます」

「わ、わかったわ」

「お待ちしております」

「ラエティアはどうして私にナチュラルストーンと聖剣アドラミティオンを授けたの？」

「ミナキさま、死闘の末、ナワクラティスは、ベルゼブルを倒し、人間界に平和を取り戻しました。数年後、聖女ナワクラティスは亡くなり、人間界は再び暗闇に包まれました。魔界の魔王ベルゼブルの子孫である魔王サタンが人間界を支配するため、ブラックストーンを子ベリアルに授け、ナワクラティスによって、ベルゼブルが倒されたことで、封印された天魔の遺産であるベルゼブルの魔剣の封印を解こうとしています」

「え！ このままでは、人間界は」

「何もしなければ、サタンに支配されてしまうでしょう。だから私は、あなたたちにナチュラルストーンを授けて、聖剣アドラミティオンの封印を解いて頂かなければなりません」

「私がナチュラルストーンと聖剣アドラミティオンをラエティアから授かり、魔王サタンを倒すということ？？」

「そうです」

「どうして私が？」

「あなたの運命だからです」

「私の運命」

ミナキは聖女ナワクラテイスの子孫、ラエティアからナチュラルストーンと神聖の遺産である聖剣アドラミティオンを授かり、魔王サタンを倒すという運命の瞳を輝かせた。

「では、私は人間界に戻ります」

「ラエティア」

ラエティアは幻獣界から姿を消した。

ミナキは『水』のサファイアを枕元で丸くなっているリスの傍に置き、再び眠りについた。

翌日、ミナキはリスと王室でパトモスとゴルティナにラエティアから聞いたことを話した。

「その昔、魔界の魔王を倒した人間界の聖女の子孫から魔界の魔王の子孫のことを聞いたのか」

「ええ」

「魔界の魔王サタンの子ベリアル。パトモス、ミナキに話しましょうか、メディアのこと、ミナキが生まれる前に起こった出来事を」

「そうだな」

9 序章

「メディアア？ 私が生まれる前に起こった出来事？」

「メディアアは私とゴルティナの子、おまえの姉になる」

「メディアアが私のお姉さま」

「そうだ」

「メディアアは生まれてすぐに魔界の魔王サタンの子ベリアルに拉致されたの。ベリアルは魔界から人間界の人間と戦うために、パトモスと私の力を貸して欲しいと言って、ここにやって来たわ。パトモスと私は人間界の人間は嫌いだったけど、人間界の人間と戦うつもりはなかったから断ったの。ベリアルがパトモスと私からメディアアを奪い、幻獣界から立ち去ろうとした時、私はベリアルからメディアアを取り戻そうとしたけど、ベリアルに重傷を負わされ、異世界に飛ばされてしまったわ」

「それでお母さまは人間界へ？」

「ええ、人間界で倒れていた私はガザに介抱されたわ。ガザの優しさに惹かれて、私はガザを愛してしまったの」

「それで私が生まれたのね」

「ええ」

「数年前から幻獣は、人間を嫌っていたが、おまえが生まれてから、徐々に人間と幻獣との絆が深まったのだ」

10 序章

ミナキはラエティア、ゴルティナの話を聞いて、魔王サタンの存在を知った。

「パトモス王、お母さま、私、ベリアルからお姉さまを取り戻し、魔王サタンを倒すわ」

「ああ、メディアを頼んだぞ」

「人間界で何かあれば、召喚魔法を使って、幻獣を呼びなさい」

「人間界の人間にゴルティナを救ってくれた礼がしたいからな。力を貸そう」

「わかったわ、パトモス王、お母さま」

「さあ、行きなさい」

「パトモス王、お母さま、私、リスと一緒に行くわね」

「気をつけてな」

ミナキはリスと幻獣界から人間界へ向かった。

ミナキがリスと人間界のリディアに足を踏み入れると、ガザが立っていた。

「お父さま！」

ミナキはガザに抱きついた。

「おお！ ミナキ！ 大きくなったな」

ガザはミナキを抱きしめた。

11 序章

「人間界に戻って来たのか」

「ええ」

リスがミナキの肩からガザの肩に飛び移り、尻尾を振った。ガザに会えて嬉しそうだ。ガザがミナキと抱き合うのをやめると、

「おお！ リスではないか。よしよし」

と言って、リスの頭を撫でた。

「ミナキもリスも元気そうだな」

「ええ」

「お父さまも元気そうで」

「ああ」

「ゴルティナは元気になっているか？」

「ええ、元気になっているわ」

「そうか、良かった」

「お母さまがお父さまに宜しくって言っていたわ」

「そうか、私は幻獣界に行けないから幻獣界に行くことがあれば、ゴルティナに宜しく伝えて」
「わかったわ」

「ミナキ、会えて嬉しいよ」

「お父さま、私もよ」

ガザとミナキは会えて嬉しそうにしている。しばらくしてから、

「ミナキ、人間界に異変が起こっている」

とガザが眉間にシワを寄せて言った。

「お父さま、私」

ミナキはガザにラエティアから聞いたことを話した。

「聖女ナワクラティスさまの子孫、ラエティアさまがおまえにナチュラルストーンと聖剣アドラミティオンを授けるとおっしゃられたのか」

「ええ」

「その昔、聖女ナワクラティスさまが魔王ベルゼブルを倒したように、おまえが魔王サタンを倒すのか」

ミナキは勢いよく頷いた。

「幻獣界の幻獣が人間界の人間に力を貸すと言ってくれているわ」

「おお！ 心強いことだ」

「お父さま、私、リスと一緒に行くわね」

「ああ、気をつけてな。疲れたらここに帰ってきて休みなさい。私はここにずっといるから」

「ええ、リス、行こう」

ガザの肩に乗っていたリスがミナキの肩に飛び乗ると、ミナキはリスとリディアを出た。

ミナキとリスがスターに会いにリディアの隣のウルに足を踏み入れると、スターが立っていた。

「スター!!」

「ミナキ! 人間界に戻って来たのね」

スターはすぐにミナキに駆け寄った。

「ミナキ、大きくなったわね」

「スターこそ」

「ミナキが人間界から幻獣界に移住してから、ミナキに会えなくて、寂しかったのよ」

「私もよ。お母さまが人間界の人間ではないから人間界にずっといられないということ、お父さまと別れて、私を連れて、幻獣界に戻るようになったから」

「そうだったわね。でも、まあ、こうして会えて良かったわ」

「私もよ」

リスがミナキの肩からスターの肩に飛び移り、尻尾を振った。スターに会えて嬉しそうだ。

「リス!」

スターはリスにキスをした。

「リスはお父さまとスターに会いたくてたまらなかったのよ」

「ミナキのお父さまにも会ったのね」

「ええ、ここに来る前にね」

「そうだったのね。リス、ミナキのお父さまと私に会えて良かったわね」

スターはリスの頭を撫でた。

「お母さまがスターに宜しくって言っていたわ」

「そう、もし、いつかミナキと幻獣界に行けたらミナキのお母さまに会いたいわね」

「スター、私」

ミナキはスターにラエティアから聞いたことを話し、ラエティアから授かったナチュラルストーンのひとつである『水』のサファイアを見た。

「私もラエティアからナチュラルストーンを授かったわ」

スターはラエティアから授かったナチュラルストーンのひとつである『天』のムーンストーンをミナキに見せた。

「スターもラエティアからナチュラルストーンを授かったのね」

「ええ、ミナキがここに来る前にラエティアが現れて、ミナキに聖剣アドラミティオンを授けるために必要だからと言って、私にナチュラルストーンを授けたの」

「そうだったのね」

「……」

ミナキの『水』のサファイアとスターの『天』のムーンストーンが共鳴して強く光った。

「これは」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者が、こうしてふたり揃ったからだわ」

ナチュラルストーンは近くにふたつ以上ある時、共鳴して強く光るものだった。

リスがビクツとして、スターの肩からミナキの肩に飛び移り、首にしがみついた。

「大丈夫よ、リス、怖くないわ」

ミナキはリスを安心させた。

「魔界の魔王サタンを倒さなくては人間界の平和を取り戻せない」

「そうね」

魔王サタンを倒すには、まず魔王サタンの子ベリアルを倒さなくてはならない。魔王サタンからブラックスストーンとベルゼブルの魔剣を授かるベリアルと戦うには、聖女ラエティアからナチュラルストーンと聖剣アドラミティオンを授かるミナキがスターをはじめとする聖女ラエティアからナチュラルストーンを授かる者と、力を合わせなければならぬ。

「スター、魔王サタンを倒すために、一緒に力を合わせて頑張ろう」

「ええ」

ミナキはスターと共に誓い合った。

「ラエティアから聖剣アドラミティオンを授かるため、スターをはじめとするラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探し求めないといけないわね」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者、『火』のロードライトガーネット、『水』のサファイア、『土』のオパール、『風』のエメラルド、『光』のキャッツアイ、『天』のムーンストーン、『気』のパール、『幻』のヒスイのうち、『水』のサファイアはミナキ、『天』のムーンストーンは私。ふたり揃ったわ。残りは、『火』のロードライトガーネット、『土』のオパール、『風』のエメラルド、『光』のキャッツアイ、『気』のパール、『幻』のヒスイね」
「ええ」

「人間界を魔界の魔王サタン思い通りにはさせないわ！」

ミナキとスターが声を揃えて言った。

リスが人間界の人間の力になるというアピールをすると、ミナキは、

「リスをはじめとする幻獣界の幻獣が力を貸してくれるわ」

と、スターに言った。

「心強いわね」

「行こう」

ミナキとリスとスターは魔界の魔王サタンと魔王サタンの子ベリアルを倒すため、ミナキとスター以外のラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探し求めウルから旅立った。

17 序章



第一章

(ピーター、今頃どこでどうしてるのかな)

ミナキはおさなじみであるピーターのことを思っていた。

七年前に世界の旅を巡る旅に出たピーターはまだ帰って来ていなかった。

「ピーター、帰って来るかな」

「まだ帰って来ていないの？」

「ええ」

「そう。旅の途中で再会できるわよきっと」

「そうね」

ミナキは旅の途中でピーターと再会できることを信じた。

「スター、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者の居場所はどうかやって見つけるの？」

「わからないわ。闇雲に歩いても、見つけられないと思うわね」

しばらく歩いていると、ミナキとスターのナチュラルストーンが共鳴して強く光った。

「これは」

「見て、ミナキ」

ミナキがスターの指した方向を見ると、ウルから遠い位置にあるリブナ帝国からミナキとスターのナチュラルストーンが共鳴して強く光った光と同じ光が輝いている。

「スター、ナチュラルストーンの光が輝いているわ。ラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいるのよ」

「きつとそうよ」

「行きましょう、スター」

「ええ」

ミナキとスターはナチュラルストーンの光の導きにより、リブナ帝国を目指した。

ミナキとスターがしばらく歩いていると、前方に洞窟が見えてきた。

「洞窟だわ」

リブナ帝国へ通じるモンリルである。

「どうやらここを通らないと先に行けないようね」

「行きましょう、スター」

「ええ」

ミナキとスターはモンリルに足を踏み入れた。

「結構暗いわね」

「じめじめして歩きにくいわね」

モンリルは薄暗く、じめじめしている。

ミナキとスターがしばらく歩いていると、前方からコボルトが現れた。

「モンスター」

「コボルトだわ」

コボルトは投石でミナキとスターを攻撃したが、ミナキは杖で、スターは剣で防御した。

「やあっ」

スターは剣をコボルトに振り下ろしたが、コボルトは盾で防ぎ、ナイフでスターを斬りつけた。

「うっ」

「スター」

ミナキはウォーターでコボルトを攻撃したが、コボルトは盾で防ぎ、ナイフでミナキを斬りつけた。

「あっ」

「キッ」

リスが怒ってコボルトを攻撃した。

「リス」

リスの攻撃を受けたコボルトはよろめいた。

「スター、今よ」

「やあっ」

スターはコボルトに剣を振り下ろした。コボルトは真つ二つになった。

「スター、リスのおかげでコボルトを倒せたわね」

「ええ」

「よしよし、よくやったわ。リス」

ミナキは肩に飛び乗ってきたリスの頭を撫でた。

「リス、やるわね」

スターがリスに顔を近づけて言うと、リスはスターの顔をぺロツと舐めた。

「ふふ」

ミナキとスターが歩き出すと、キラビーがこちらの方向に飛んできた。

「モンスター」

「キラビーだわ」

「うっ」

「ミナキ」

ミナキはキラビーに刺され、毒を受けた。ミナキの顔色が悪くなっていく。

「キラビーの針には毒があるわ」

「だ、だから殺人蜂ね。ううっ」

ミナキは毒による苦痛に苦しみながら言った。

「キュアで治すわ」

スターがミナキの毒を回復魔法のキュアで解毒しようとする、ミナキの肩に乗っているリスが角をミナキの顔に向けて、光を放った。ミナキの顔色が良くなっていく。

「リス、ありがとう」

「あ、そうか。リスの角は解毒する効果があるのよね」

「そうよ。昔、私、スター、ピーターがリディアの森でアスピスと戦って、ピーターが毒を受けてしまって、リスが解毒したことを覚えているかしら」

「覚えているわ。ピーターが「毒を受けたって、リスがいるから大丈夫さ」と言っていたわよね」

「ええ」

「やっ」

ミナキは杖でキラビーを叩き落した。

「ふうっ」

「一息つくにはまだ早いわね。見て、ミナキ」

ミナキがスターの指した方向を見ると、コボルトとキラビーの集団がやってきた。

「モンスターがたくさんいるわね」

モンリルはモンスターの巣窟となっている。行く手を遮るモンスターを倒しながら進まなければならぬ。

「モンスターを倒さずにここを抜けるのはとても困難だわ。倒さないといけないわね」

「ええ」

ミナキとスターはモンスターと戦い、ダメージを受けながらも、歩みを進めた。

ミナキとスターがモンリルを抜けると、辺り一面森が広がっていた。

「森だわ」

モンリルからすぐのリブナ帝国を囲んでいるリブナの森である。

「洞窟の次は森ね」

「行きましょう、スター」

「ええ」

ミナキとスターがリブナの森に足を踏み入れると、目の前には何人も人が倒れている。

ミナキとスターが倒れている人たちに近寄り、呼びかけたが、すでに死んでいるので、返事はなかった。

「この人たち、死んでいるわね」

「魔王の仕業かしら」

「わからないわ。でも、人間界と魔界の戦いはもう始まっているからもしかしたら」

「だとしたら、魔王を倒さないと人間界が危ないわね」

「そうね」

（魔王を倒すためにラエティアからナチュラルストーンを授かる者を一刻も早く見つけないといけない）

「この人たち、兵士の格好をしているわね」

倒れている人たちはリブナの森で見張りをしていたリブナ兵である。

「ん？」

よく見ると、ツルがからまっている。何者かによって、ツルで絞殺されたようだ。

「ツルがからまっているわね」

「この森で何が起きているのかしら」

「わからないわ。今は、先に進むしかないわね」

「そうね。この森を抜けたら、何かあるかもしれない。行きましょう、スター」

「ええ」

ミナキとスターは歩みを進めた。

何者かが木の上からミナキとスターを見つけた。

「へッ……見つけたぜ」

何とピーターだった。ピーターはミナキに向けて弓を構えた。どうしたことかミナキを狙っていた。だが、今ここでミナキを狙うと、スターと一緒にいるので、不利だと思い、狙うのをやめた。

「次に見つけた時はおめえの最期だぜ」

ピーターは背を向けて去って行くミナキを見て言った。そして、「フッフ」と笑いながら、リブナの森のどこかに消えた。

ピーターに狙われていることをミナキはまだ知らなかった。

ミナキとスターがリブナの森を抜けると、リブナの森から離れたところに城があった。リブナ帝国の皇帝クリスタルの城、クリスタル皇帝城である。

「スター、城が見えるわ」

「ミナキ、ナチュラルストーンの光が輝いていた場所ね」

「ええ。ラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいるのだわ」

「きつとそうね」

「行きましよう、スター」

「ええ」

ミナキとスターはクリスタル皇帝城に向かった。

ミナキとスターがクリスタル皇帝城城門に近づく、城門前に立っている二人のリブナ兵がミナキとスターを迎えた。

「ようこそ、クリスタル皇帝城へ。さあ、中へお入りください。クリスタルさまがお待ちしております」

「クリスタルさま？」

「ここリブナ帝国の皇帝です」

「クリスタルさまが私たちを待っているの？」

「はい。あなたがたはラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者ですよ」

「ええ」

「先程、ナチュラルストーンの光がここから遠い位置にあるところから輝いていたのを見ました」
「私たちもよ。だからここに来たの」

「そうでしたか。クリスタルさまにお会いになり、ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者であるオリビアさまとアマウスさまについてお聞きください」

「オリビアさまとアマウスさま？」

「ここリブナ帝国の皇女です」

「わかったわ。行きましよう、スター」

「ええ」

ミナキとスターは城門前に立っている二人のリブナ兵に背を向けて城内に入って行った。城内にはリブナ兵が何人か見張りに立っている。

見張りのリブナ兵はミナキとスターを見ると、

「よく来てくださいました。クリスタルさまがいらっしやる皇室はこちらです」

と敬礼して、クリスタルがいる皇室の方向を手のひら全体でさした。

ミナキとスターが皇室に足を踏み入れると、玉座に座っていたクリスタルが立ち上がり、「ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者よ、よく来てくれた」とミナキとスターに声をかけた。

「あなたがクリスタルさまですか」

「そうだ。きみたちの名前を聞かせてもらおう」

「私はミナキです」

「私はスターと申します」

クリスタルに名前を聞かれたミナキとスターは名乗った。

「ミナキにスターか」

「はい」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者であるオリビアさまとアマウスさまについて、城門前に立っている二人のリブナ兵から聞きました。もっと聞かせてください」

「そうか。きみたちにオリビアとアマウスについて話す前に、きみたちのナチュラルストーンを見せてもらいたい」

「わかりました」

ミナキとスターはクリスタルにナチュラルストーンを見せた。

クリスタルはミナキとスターのナチュラルストーンを見て、

「おお、ここで三人、ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者が揃ったか」と言った。

「え？ 三人？」

「ミナキ、私、オリビアさま、アマウスさまの四人ではないでしょうか？」

「オリビアとアマウスは姉妹だから、ラエティアさまは「私の代わりにナチュラルストーンを二人のどちらかに授けて欲しい」とおっしゃられたのだ」

クリスタルはミナキとスターの疑問に答えると、ミナキとスターにオリビアとアマウスについて話し始めた。

「オリビアとアマウスは私の娘だ」



「オリビアさまとアマウスさまはクリスタルさまの子？」

「そうだ。私はそろそろ帝位継承者を決めようとしている。帝位継承者になった者がラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者として、きみたちと一緒に魔王を倒しに行くことになる」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者はオリビアさまか、アマウスさまということですね？」

「そうだ」

「オリビアさまとアマウスさまはどこにいらっしやいますか」

「部屋にいる。会って、悩みを聞いてあげてくれ」

「オリビアさまとアマウスさまは悩んでいらっしやるのですか」

「そうだ。いろいろあつてな」

「わかりました」

「おい、おまえたち、この者たちにオリビアとアマウスの部屋を案内しろ」

「はっ」

クリスタルの玉座の傍らに立っている二人のリブナ兵はクリスタルの玉座を離れて、ミナキとスターに近寄り、

「我々についてきてください」
と言った。

「では、クリスタルさま、失礼致します」

ミナキとスターはクリスタルに一礼して、オリビアとアマウスの部屋へとミナキとスターを案内する二人のリブナ兵と皇室を出た。

オリビアとアマウスの部屋がある階まで来ると、

「オリビアさまのお部屋はこちらです」

オリビアとアマウスの部屋へとミナキとスターを案内する二人のリブナ兵はオリビアの部屋の方を手のひら全体でさした。

「アマウスさまのお部屋は？」

「あちらです」

オリビアとアマウスの部屋へとミナキとスターを案内する二人のリブナ兵はアマウスの部屋の方を手のひら全体でさした。

アマウスの部屋はオリビアの部屋から少し離れた位置にある。

「では、我々はこちらで失礼致しますので、オリビアさまとアマウスさまにお会いください」

「わかったわ」

オリビアとアマウスの部屋へとミナキとスターを案内した二人のリブナ兵はミナキとスターの背を向けて、クリスタルがいる皇室へと戻った。

ミナキとスターがオリビアの部屋に足を踏み入れると、オリビアが立っていた。

「あなたたちは？」

「私はミナキです」

「スターです」

ミナキとスターは名乗った。

「ミナキにスターね」

「あなたとアマウスさまのことはクリスタルさまから聞きました」

「お父さまに会ったのね」

「ええ」

「あなたたちはもしかしてラエティアからナチュラルストーンを授かる者？」

「そうです」

「オリビアさまとアマウスさまもラエティアからナチュラルストーンを授かる者ですよね？」

「そうよ。でも、帝位継承者になった者がラエティアからナチュラルストーンを授かる者だから、私か、アマウスかは、お父さまが決めるまでまだわからないわ」

「そうですか」

「私、悩んでいることがあるの」

「悩みを聞きましょうか」

ミナキとスターはオリビアの悩みを聞こうとすると、オリビアは悩みを打ち明けた。

「アマウスのことなの」

「アマウスさまのこと？」

「そう。アマウスは皇女でありながら、お父さまの後継ぎのことを私と一緒に考えていなくてね。私がいるから自分に関係ないと言っているの」

「それはよくないですね。アマウスさまは皇女ですから、クリスタルさまの後継ぎのことをオリビアさまと一緒に考えないといけません。もし、オリビアさまに何かあったらどうするのですか」

「そうよ。アマウスはもし、私に何かあったらどうするのか。皇女らしくないからもう」

オリビアは困ったようにため息をついた。

「私たちがアマウスさまに皇女らしくしてと言いまししょうか」

「うん。私が言っても聞かないからね」

「アマウスさまが帝位継承者になったら、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者として、私たちと一緒に魔王を倒しに行くことになるのですから、同じラエティアからナチュラルストーンを授かる者として、私たちがアマウスさまに言ってみます」

「そうね。あなたたちが言ったら聞くかもしれない。アマウスは部屋にいるわ。アマウスに会って」

「わかりました」

ミナキとスターはオリビアの部屋を出て、アマウスの部屋に向かった。

ミナキとスターがアマウスの部屋に足を踏み入れると、アマウスが立っていた。

「きみたちは？」

「私はミナキです」

「スターです」

ミナキとスターは名乗った。

「ミナキにスターか」

「あなたとオリビアさまのことはクリスタルさまから聞きました」

「父上に会ったのか」

「ええ」

「そうか」

ミナキとスターがアマウスに皇女らしくしてと言おうとすると、アマウスが先手を打った。

「私、悩んでいることがあるのだ」

（先手を打たれたわね。まあいいわ）

「悩みを聞きましょうか」

ミナキとスターはアマウスの悩みを聞こうとすると、アマウスは悩みを打ち明けた。

「姉貴のことだ」

「オリビアさまのこと？」

「そうだ。姉貴が皇女らしくしてとうるさくてね。父上がそろそろ帝位継承者を決めようとしているけど、第一皇女の姉貴に決めるだろうから父上の後継ぎのことを姉貴と一緒に考えなくていい。姉貴がいるから私は関係ないよ」

「いいえ。アマウスさまは皇女ですから、クリスタルさまの後継ぎのことをオリビアさまと一緒に考えないといけません。もし、オリビアさまに何かあったらどうするのでしょうか」

「……」

「だからオリビアさまはあなたに皇女らしくしておっしゃっているのではないのでしょうか」

「私は帝位継承なんて嫌だ。だから父上の後継ぎのことを姉貴と一緒に考えたくない」

帝位継承とは、帝位（皇帝の位）を皇女など王位継承者に譲ることである。クリスタルはリブナ帝国の将来を考えて、帝位継承者を決めようとしている。第一皇女のオリビアが帝位継承者になっても、アマウスは第二皇女なので、ゆくゆくは帝位継承者となるのだが、帝位継承者になりにくくなかった。

しばらく沈黙が続いた後にこのままアマウスが皇女らしくしないと、クリスタルとオリビアのためにもよくないので、ミナキとスターは口を開いた。

「アマウスさま、皇女らしくしてください。あなたは皇女でしょう」

「私たちはラエティアからナチュラルストーンを授かる者です。アマウスさまが帝位継承者にな

「つたら、あなたはラエティアからナチュラルストーンを授かる者として、私たちと一緒に魔王を倒しに行くことになるのです」

「帝位継承者になるのは姉貴だ。姉貴がラエティアからナチュラルストーンを授かる者として、きみたちと一緒に魔王を倒しに行くことになる。私じゃない」

「ミナキとスターはアマウスに皇女らしくしてと何度も言ったが、アマウスは聞かなかった。皇女なんて嫌だ」

「アマウスは皇族である自分に嫌気がさして、部屋の開いた扉をふさぐように立っているミナキとスターをどかして、部屋を出て行った。」

「アマウスさま」

「ミナキとスターがアマウスの部屋を出て、アマウスの後を追ったが、アマウスの足はミナキとスターより速いので追いつかなかった。」

「ミナキとスターが窓から外を覗くと、クリスタル皇帝城を出て行くアマウスの姿が見えた。」

「アマウスさまが出て行ってしまった」

「オリビアさまに言わないと」

「ミナキとスターがオリビアの部屋に向かおうとすると、そこにはオリビアがいた。」

「あ、オリビアさま。アマウスさまが」

「出て行ったわね。止めたけど、ダメだったわ」

「すみません。私たちのせいだ」

「皇女らしくしてと言っても、聞かなかったからでしょう。あなたたちのせいではないわ。とにかくお父さまに言いましょう」

「はい」

ミナキとスターがオリビアと皇室に向かおうとすると、クリスタルがバタバタと駆けてきた。

「クリスタルさま」

「お父さま」

「アマウスが出て行ってしまった。心配だ。ミナキにスターよ、オリビアとアマウスを探して欲しい」

「わかりました」

「アマウスがリブナの森に入ったらいけない。ここで見張りをしていたリブナ兵が何人か死んでいたのを見ただろう。何が起きているのかわからない」

今リブナの森に見張りのリブナ兵はひとりもない。クリスタルが退避させているからだ。アマウスが見張りのいない無防備なリブナの森に入ったら危険な目に遭うだろう。

(アマウスさまが危ないわね)

「オリビアさま、アマウスさまを探しに行きましょう」

「ええ」

ミナキとスターはオリビアとアマウスを探しに行った。

「頼んだぞ」

クリスタルは去って行くミナキ、スター、オリビアの背中を見つめながら、「頼む。アマウスを見つけてくれ」と祈った。

ミナキはスター、オリビアとリブナの森に入ると、

「スター、オリビアさま、手分けしてアマウスさまを探しましょう」と言った。

「わかったわ」

「ええ」

ミナキはスター、オリビアと手分けしてアマウスを探した。

「キツ」

リスはミナキの肩から飛び降りて、走って行った。

(リス、アマウスを探しに行ったのね。私も)

ミナキはリスの後を追うように走って行った。

ミナキたちがアマウスを探しに、リブナの森に入ってから、どれだけ時間が過ぎたのか、アマ

ウスはすぐに見つからなかった。

リスがミナキの肩から飛び降りてから時間をかけてアマウスを探して歩いていると、前方に地面に座り込んだまま、うつむいているアマウスが見えた。

「キツ」

リスはアマウスに駆け寄り、アマウスの肩に飛び乗った。

「な、何だ」

驚いたアマウスは顔を上げた。

「キツ」

「ミナキの肩に乗っていた角が生えた栗鼠か」

「キツキツ」

リスがアマウスに話しかけるように鳴くと、アマウスはよくわからないという顔をして、

「何を言っているのかわからないよ」

と言った。

ミナキならリスが話しかけるように鳴いたら、何を言っているのかわかるが、ミナキ以外の者はわからなかった。

「キツ」

リスがアマウスに帰ろうと訴えると、アマウスは疲れた顔をして、

「私のことは放っておいてくれよ」

と言って、

(どうして、私、皇族に生まれたのだろうか)

そう思いながら、再びうつむいてしまった。

アマウスの肩から飛び降りたリスは、ミナキたちにアマウスを見つけたことを知らせるために走って行った。

ミナキはアマウスを探しに行ったリスの後を追ったが、最初から距離があつたのが縮まるどころか広がってゆくばかりで、とうとうしまいには姿を見失ってしまった。

「アマウスさま」

大声で名前を呼びながら探していると、手分けしてアマウスを探していたオリビア、スターと合流した。

「あ、スター、オリビアさま」

「ミナキ」

「アマウスさまを見つめましたか」

「いえ」

「アマウスさま、どこを探しても見つからない」

「ああ、アマウスさま」

「アマウス、どこにいるの」

オリビアはどこを探しても見つからないアマウスを心配した。
突然ツルがミナキ、スター、オリビアに襲いかかってきた。

「これは」

「ここで見張りをしていたリブナ兵の遺体からまっていたツルだわ」

「みんな、ツルにからめとられないように注意して」

「ええ」

襲いかかってきたツルをミナキは杖で叩き折って、スターは剣で、オリビアは槍で切り裂いて行った。

「何とかツルにからめとられないようにしたわね」

「ええ」

「アマウスさま、大丈夫かしら」

「ツルにからめとられていなければいいけど」

「アマウス、無事でいて」

オリビアはアマウスの無事を祈った。

（ツルが襲いかかってくるなんて。ここで何が起きているのかしら）

ミナキはそう思いながら、辺りに散らばったツルの破片を見つめた。

「オリビアさま、ここには危険です。一刻も早くアマウスさまを見つけて帰りましょう」

「そうね」

「さあ、アマウスさまを探しましょう」

「ええ」

ミナキとスターはオリビアとアマウスを探した。

しばらくすると、リスが走ってきた。

「リス」

「キツキツ」

「アマウスさまを見つけたからついてきてと言っているわ」

「何だって」

リスはミナキたちにアマウスを見つけたことを知らせると、アマウスがいる場所に向かって走って行った。

「スター、オリビアさま、リスの後に続きましょう」

「ええ」

ミナキはスター、オリビアとリスの後に続いて、走って行った。

ミナキたちがアマウスがいる場所に向かうと、リスが地面に座り込んだまま、うつむいているアマウスを見守りながら待っていた。

「キツキツ」

「リス、ありがとう」

ミナキがリスに礼を言うと、リスはミナキの肩に飛び乗った。

「リス、アマウスさまを見つけるなんて、えらいわね」

スターがリスの頭を撫でると、リスはスターにほめられて嬉しそうに尻尾を振った。

「リスがいると心強いわね、ミナキ」

「ええ」

ミナキとスターはリスと一緒にいてくれて良かったと思った。

「アマウスさま」

「アマウス」

ミナキ、スター、オリビアがアマウスに駆け寄ると、アマウスは顔を上げて、

「ミナキ、スター、姉貴」

と言って、驚いて立ち上がった。

「アマウスさま見つかって良かったです」

「きみたち、どうして私がここにいたことがわかった？」

「あなたを見つけたリスが私たちに知らせてくれたからです」

(そうか、私の肩に飛び乗ってきたあの角が生えた栗鼠があれをついてこさせたのか)

ミナキ、スター、オリビアはアマウスを取り囲んだ。

(しまった)

アマウスはオリビアに皇女らしくしてと言われると思い、早々にここを逃げ去ろうとしたが、ミナキ、スター、オリビアに取り囲まれてしまった。

「アマウス、ここから逃げ去ろうとしても無駄よ」

オリビアはアマウスを逃がさないぞと言わんばかりの視線でアマウスを見つめた。

「姉貴、おまえ」

「アマウス、お願い、皇女らしくして」

「姉貴、私は皇族に生まれた自分が嫌いなんだよ」

アマウスに皇女らしくして欲しいという願いを込めて言ったが、アマウスは聞かなかった。

「アマウスさま」

「アマウス」

「……」

アマウスは黙ったまま何も言わなかった。

しばらく沈黙が続いた後、

「アマウス、帰りましょう」

「嫌だ、私は帰らない」

「アマウスさま、ここにいると危険です。私たちがここに来た時、ここで見張りをしていたリブナ兵が何人か死んでいたのを見ました。あなたも見たでしょう。何が起きているのかわからないのです」

「クリスタルさまがあなたを心配しています」

「さあ、帰りましょう、アマウス」

「帰るくらいなら、ここにいるほうがまだ」

「アマウスさま」

「アマウス」

城に帰ろうとしないアマウスにミナキ、スター、オリビアは困ってしまった。

しばらくすると、突然ミナキの背後から短剣が飛んできた。

ミナキとアマウスを挟んで向かい合わせで立っていたオリビアはいち早く気づき、

「ミナキ、危ない！」

と言って、ミナキをかばって捨て身に出た。

「オリビアさま！」

「うっ！」

短剣はオリビアの背中に命中した。

「姉貴！」

「ミ、ミナキ、ぶ、無事でよ、良かったわ」

オリビアはミナキの足元に崩れるように倒れた。

「オリビアさま！ しっかりしてください！」

ミナキは倒れたオリビアを抱えた。

(オリビアさまが私の背後から短剣が飛んできたのを気づかなかった私のために)

ミナキはそう思いながら、オリビアに対して申し訳ない気持ちになった。

アマウスはオリビアの背中に刺さった短剣を抜くと、

「よくも姉貴を」

と言って、怒りを込めて放り投げた。

オリビアは瀕死の状態になっている。

「姉貴、姉貴！」

アマウスはオリビアに何度も呼びかけたが、オリビアは意識が朦朧としていて返事ができる状況ではなかった。

「スター、お願い、オリビアさまに回復魔法をかけて！」

「わかったわ！」

スターは回復魔法であるヒールをオリビアにかけたが、オリビアの背中に命中した短剣は妖魔の短剣で命中すると即死する効果があるため、効かなかった。

「回復魔法が効かないわ」

「そんな」

オリビアはもう助からなかった。

「姉貴、しっかりしろ！ 死んだらダメだ！」

アマウスはオリビアの肩を掴んで揺すって必死に呼びかけた。

「ア、アマウス、リ、リブナ帝国を、ち、父であるクリスタル皇帝を頼むわよ」

オリビアはアマウスにそう言い残すと、息を引き取った。

「オリビアさま！」

「姉貴！ うわああああああ」

アマウスはオリビアの遺体にしがみついて泣いた。

（オリビアさま、私のために）

アマウスはオリビアの死を悲んだ後、

「姉貴が死んだのは私のせいだ。姉貴の言うことを聞いておけば、このようなことにはならなかった」

と言って、自分を責めて落ち込んだ。

「アマウスさま、どうかご自分を責めないでください」

ミナキとスターは落ち込んでいるアマウスを慰めた。

しばらくしてアマウスはオリビアの遺体を両手で抱きかかえると、

「ミナキ、スター、帰ろう」

と言った。

「アマウスさま」

「姉貴をこのままにしておけないからな」

「そうですね。オリビアさまのためにも」

「さあ、帰ろう」

アマウスはオリビアの遺体を抱かかえて、ミナキ、スターとクリスタル皇帝城へ帰って行った。

「ちっ、邪魔が入ったか」

木の上から飛び降りたピーターは落ちていた妖魔の短剣を拾うと、リブナの森のどこかに消えた。

妖魔の短剣をミナキの背後から投げつけたのは何とピーターであった。ピーターはどうしたのかミナキを狙っていた。ミナキの隙を狙って妖魔の短剣をミナキに投げつけたが、オリビアがミナキをかばって、邪魔が入ったので失敗に終わってしまった。

ミナキ、スター、オリビアの遺体を抱かかえたアマウスがクリスタル皇帝城へ入り、クリスタ

ルがいる皇室に向かうと、クリスタルがアマウスが抱かかえたオリビアを見て、

「アマウス！ どうしたのだオリビアは」

と言った。

「父上、姉貴は」

「死んだのか？」

「……」

アマウスは黙ってしまった。

「死んだのか？」

クリスタルが再度問いただと、アマウスは頷いた。

「何ということだ」

クリスタルは動揺を隠せなかった。

「一体、オリビアに何があったのだ」

「父上、姉貴の遺体を安置しよう。それから姉貴に何があったのかを話すよ」

「そ、そうだな」

オリビアの遺体はクリスタルとアマウスによって、棺に納められ、皇室に安置された。

アマウスはミナキ、スターとクリスタルにオリビアの死について話した。

「父上、姉貴はリブナの森で突然飛んできた短剣に刺さって死んだのだ」

「何と、誰が短剣を投げつけてきたのだ」

「わからない」

「クリスタルさま、短剣は私の背後から飛んできました。だからオリビアさまは私のために」

「ミナキ、おまえをかばったというのか」

「はい」

「そうか、オリビアはきつとおまえが死んでしまったら、ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者が揃わなくなると思って、おまえをかばったのだろう」

クリスタルの予想は的中していた。オリビアは人間界が魔界と戦うためにラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授かるミナキが死んでしまったら、魔王を倒すことはできないと思い、ミナキを妖魔の短剣から救ったのだ。

「すみません」

ミナキはクリスタルに自分のためにオリビアを死なせてしまったことを謝った。

「いや、謝ることはない。おまえはラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授かり、魔王を倒さなくてはならないからな。そんなおまえをかばったオリビアはよくやったと思う」

「クリスタルさま」

しばらくしてクリスタルはアマウスを見つめると、

「アマウス、帝位継承者になれ」

と言った。

「はい、父上」

アマウスはオリビアのためにも帝位継承者になることを決意した。そして、皇女らしくするようになった。

「アマウスさま」

ミナキとスターは帝位継承者となったアマウスに一礼した。

「さあ、アマウス、オリビアの棺を墓地に埋葬しようか」

「はい、父上」

「ミナキにスターよ、きみたちにも付き添ってもらいたい」

「わかりました」

クリスタルとアマウスがオリビアの棺を抱えて、皇室を出ると、ミナキとスターは後続くように皇室を出た。

オリビアの棺はクリスタルとアマウスによって、クリスタル皇帝城の城下町にある墓地に埋葬された。

(リブナの森で見張りをしていたリブナ兵の遺体も埋葬しなければならないな)

クリスタルはそう思いながら、ミナキ、スター、オリビアとクリスタル皇帝城の城下町にある

墓地を後にした。

クリスタルはミナキ、スター、アマウスと皇室に戻ると、

「アマウス、これを」

と言って、ラエティアの代わりにナチュラルストーンのひとつである『光』のキャッツアイをアマウスに授けた。

「はい、父上」

アマウスはクリスタルからナチュラルストーンのひとつである『光』のキャッツアイを受け取った。オリビアの遺志を継ぎ、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者となった。

「！」

ミナキの『水』のサファイア、スターの『天』のムーンストーン、アマウスの『光』のキャッツアイが共鳴して強く光った。

「これは」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者が、こうして三人揃ったからだわ」

「おお、アマウスがラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者となったことで、ここで三人、ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者が揃った」

クリスタルは共鳴して強く光ったミナキの『水』のサファイア、スターの『天』のムーンストーン、アマウスの『光』のキャッツアイを見つめて言った。

第二章

クリスタルにとって、アマウスが見つかって、帝位継承者となり、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者となったのは喜ばしきことだが、オリビアが死んでしまったのは残念でならなかった。

クリスタルはミナキとスターにリブナの森で何が起きているのかわからないままでは、リブナ帝国の平和を脅かすことにつながると思い、

「ミナキにスターよ、アマウスとリブナの森で何が起きているのかを調べて欲しい」と言った。

（襲いかかってきたツル、飛んできた短剣、リブナの森には何者かが潜んでいるわね）

ミナキとスターはそう思いながら、皇室の窓から見えるリブナの森を見て、

「わかりました」

とクリスタルを見つめて言った。

「リブナの森で見張りをしていたリブナ兵の遺体を埋葬したいが、今は危険だから搬出できない」

「確かにそうですね」

「父上、私はミナキ、スターと姉貴の敵討ちのために行くよ」

アマウスはオリビアの命を奪った妖魔の短剣の持ち主を憎んでいた。

オリビアの命を奪った妖魔の短剣の持ち主はピーターだが、ミナキ、スター、アマウスはまだ知らなかった。

「短剣が飛んできたということは、リブナの森には何者かが潜んでいます。魔界の者かもしれません。必ず見つけます」

「頼んだぞ。リブナの森に魔界の者が潜んでいたら、リブナ帝国は大変なことになる」

「アマウスさま、リブナの森に行きましょう」

「ああ」

ミナキとスターはアマウスとリブナの森に向かった。

ミナキはスター、オリビアとリブナの森に入ると、

「スター、アマウスさま、手分けしてここリブナの森で何が起きているのかを調べましょう」と言った。

「わかったわ」

「ああ」

ミナキはスター、アマウスと手分けしてここリブナの森で何が起きているのかを調べた。

(ここリブナの森で何が起きているの)

ミナキがそう思いながら、ひとりであちこち調べ歩いていたら、突然、木の上からピーターが飛び降りてきた。

「あ、ピーター」

ミナキはピーターを見てすぐにわかった。七年前のピーターと容姿がぜんぜん変わっていないかったからだった。

ミナキはピーターと再会した。

「ピーター、ここであなたに会えて、びつくりしたけど、会いたかったから嬉しかったわ」
「……」

ピーターは黙ったまま不気味な笑みを浮かべていた。

「ピーター？」

「……」

「どうしたの？ 私よ、ミナキよ」

「……」

「私のこと、覚えていないの？」

「……」

「小さい頃からリディアの森でいつも一緒に遊んでいたじゃない」

「……」

「忘れたの？」

「……」

ミナキがピーターに話しかけてもピーターは何も言わず黙ったまま不気味な笑みを浮かべていた。

こんなことが続く中、ミナキはピーターの様子がおかしいことに気づいた。

「ピーター」

ミナキがピーターに呼びかけると、

「おめえ、どっかで見えたことあるなア、だがな、上の命令だ。死ね!!」

ピーターは腰に差してあった鞘から短剣を抜き、ミナキに襲いかかった。

「何をするの、ピーター!!」

「おめえを切りつけてやるのよ!!」

ピーターがミナキに切りつけようとする、

「ミナキ!!」

スターがミナキを助けようと駆けつけた。

「あの子はピーター」

スターもピーターを見てすぐにわかった。やはり七年前のピーターと容姿がぜんぜん変わって

いなかったからだだった。

「スター！」

「おめえは邪魔だ！」

ピーターは森魔法でツルを操った。ツルがミナキを助けようと駆けつけたスターに襲いかかってきた。

「きゃっ」

スターは両手と両足を襲いかかってきたツルにからめとられ、宙に浮いた。その時、スターは持っていた剣を落としてしまった。

「しまった！ 剣を落としたわ」

「スター！」

「うっ、動けないわ」

スターは動きを封じられてしまった。

（これはここで見張りをしていたリブナ兵の遺体に絡まっていたツル、ミナキ、オリビアさまと
いなくなったアマウスさまを探していた時に襲いかかってきたツルだわ）

スターは森魔法でツルを操った。ピーターを見て、ピーターの仕業に違いないと思った。

「俺の狙いはこいつだ、おめえじゃねえ。おめえはおとなしくしているろ」

ピーターはスターにミナキを指さして言った。

動きを封じられて、何もできないスターはおとなしくするしかなかった。

ピーターはこうしてスターをおとなしくさせた。

一方、アマウスはひとりであちこち調べ歩いていたが、ここリブナの森で何が起きているのかを調べることでより、ここリブナの森に潜んでいるオリビアの命を奪った妖魔の短剣の持ち主を見つけて倒すことを考えていた。

(姉貴の仇だけではなく、リブナ兵の仇も討たなければならぬ)

アマウスはそう思いながら、あちこちに横たわっているここリブナの森で見張りをしていたリブナ兵の遺体を見つめていた。

アマウスが歩いていたら、突然ツルがアマウスに襲いかかってきた。

(これはここで見張りをしていたリブナ兵の遺体に絡まっていたツルではないか)

アマウスはそう思うと、絞殺されてたまるかと言わんばかりに襲いかかってきたツルを避けながら走っていたが、何かに躓いて転びかけた所に避け損ねたツルに足をからめとられてしまった。

「くっ」

アマウスが足に絡みついたツルを引きちぎろうとした瞬間、ツルはアマウスを引き倒し、投げ飛ばした。

「うっ」

投げ飛ばされたアマウスは近くにあった木にぶつかって意識を失って倒れてしまった。

スターはミナキを狙っている。ピーターを見て、なぜだろうと疑問に思った。

「ピーター、どうして私を狙っているの？」

ミナキがピーターに自分が狙われている理由を聞くと、ピーターはミナキに向かって短剣を突きつけて、

「おめえを殺すからよ」

と言った。

「何だって？」

ミナキは驚いて言った。

「上の命令でね」

「上？」

「魔王だよ」

「魔王だって？」

「俺はピーターではない、ラットだ。魔界の四天王の一人だ」

「ラット？ 魔界の四天王の一人だって？」

「そうだ」

ラットはヘツと笑った。

ピーターは魔王に洗脳され、悪の心をうえつけられてしまい、魔界の四天王となってしまった。

ラットは魔王がつけたピーターの名前である。

「ピーター、そんな……」

ミナキはピーターのあまりの変貌にショックを受けた。

（ピーター、いやラット、魔王に洗脳され、悪の心をうえつけられてしまい、魔界の四天王となつてしまったのね。ミナキがラットを倒したら、良心を取り戻すわ）

スターはそう思うと、ショックを受けた顔をしているミナキを見て、

「ミナキ！ ピーター、いやラットと戦うのよ！ ラットを倒したら、魔王に洗脳されたラットは元のピーターに戻るわ。だから、辛いだろうけど、頑張つて！」

と言って、励ました。

ミナキはスターを見て、スターの言うとおりだと思い、

「スター、私、ラットと戦うわ！」

と言って、杖を握り締め、ラットと戦う決意をした。

ミナキはラットを見て、

「ピーターいや、ラット、私、あなたと戦うわ！」

と言って、ラットに向かって杖を突きつけた。

「へッ、俺と戦うだと？」

「ええ、あなたを倒す！」

「へッ、俺を倒すだと？ おめえに俺は倒せねえよ！」

ラットの言うとおり、ミナキがラットを倒せる可能性はゼロに等しかった。なぜならラットは魔王によって、強化されている。その上、ミナキの魔法の属性はラットの魔法の属性である土に弱い水なので、ミナキとラットが魔法を使って戦うと、大きなダメージを受けてしまうのはミナキなので、ラットとの戦いは魔法を使った攻撃が主なミナキに不利だった。

「リス、スターをお願いね」

ミナキはリスにラットの森魔法で動きを封じられ動けないスターを見守るように指示した。

リスはミナキの肩から木に飛び移ると、ツルにからめとられて宙に浮いているスターの位置まで駆け上って、スターの肩に乗った。

「ラット、この戦いは私とあなたの戦い。スターを巻き込みたくない。だからスターから遠く離れて戦いましょう」

「ああ。おめえを殺す邪魔が入らないから丁度いいぜ」

ミナキはラットと一対一で戦うため、スターから遠く離れた場所に移動した。

(回復魔法、補助魔法でミナキを助けてあげられないなんて)

スターは動けない自分が悔しかった。回復魔法、補助魔法はかける相手が自分から離れるとかげられないからだ。

スターがふと見ると、スターの肩に乗ったリスが空を見上げていた。スターも一緒になって、

空を見上げると、空に月が浮かんでいるのが見えた。

(月だわ。よし、月魔法でミナキを助けてあげられる)

スターは月を見て喜んだ。スターの月の力を利用する魔法、月魔法はかける相手が自分から離れていてもかけることができるからだ。

(ミナキ、私のことは心配しないで。リスが見守ってくれているから大丈夫よ。だから安心して、ラットと戦って)

スターはそう思うと、ミナキの勝利を祈った。

リスはラットの森魔法で動きを封じられ動けないスターを見守っていた。

スターから遠く離れた場所に着いたミナキとラットは互いに向き合って立っていた。

しばらくしてラットが口を開いた。

「おい、おめえ、覚悟はできたか？」

「何の覚悟かしら」

「もちろん死ぬ覚悟だよ」

ラットが短剣を構えると、ミナキも杖を構えた。

「ラット、私は魔王を倒すまで死ぬわけにはいかない」

「魔王を倒すまで死ぬわけにはいかないだと？　へッ、たわけたことを」

ラットがミナキに向かって走り出し、短剣を振り下ろすと、ミナキは杖で受け止めた。



(へッ、今すぐおめえを殺すのは簡単なんだぜ。だが、それでは面白くない。徹底的に痛めつけてから殺してやるぜ)

ラットはそう思うと、ミナキを見て、ニヤリと笑った。

ミナキはラットから殺気を感じて飛び退いた。

ラットがミナキを今すぐ殺すことは容易なことだった。なぜなら弓で矢の代わりに飛ばして、相手に命中させると、相手を即死させられる効果がある妖魔の短剣を魔王から授かったからである。

ラットは妖魔の短剣を懐に隠し持っているので、オリビアの命を奪った妖魔の短剣の持ち主がラットであることを今のミナキは知らない。

(さあ、徹底的に痛めつけてやるか)

ラットはそう思うと、右手で持っていた短剣を腰の鞘に収め、左手で持っていた弓を構えた。

(殺されるわけにはいかない)

ミナキはラットの殺気に杖を構えて後ずさりながらも、そう思った。

「くらえ」

ラットが弓を射ると、ミナキは杖で矢を弾きながら、ラットに向かって走り出し、ラットに杖を振り下ろした。

「くっ」

ラットは弓で杖を受け止めたが、弾き飛ばされてしまった。

「おめえ、なかなかやるじゃねえか」

地面に倒れたラットは地を手について起き上がると、ヘッと笑った。

ミナキは自分を「おめえ」と呼んで、名前で呼ばないラットを見て、なぜだろうと疑問に思った。

「ラット、どうして私を名前で呼ばないの？」

ミナキがラットに名前で呼ばれない理由を聞くと、ラットは首をかしげて、

「おめえの名前なんてわからねえよ」

と言った。

「えっ、わからないの？ 私の名前はミナキよ」

「ミナキ？」

「そうよ、ミナキよ」

ミナキがラットに名前を教えても、ラットは首をかしげて、

「わからねえよ」

と言った。

ラットは記憶を魔王に消され、なくしてしまっているのです、ミナキのことはわからないが、魔界の手下となってしまうので、ミナキを殺すように言われている。

「ラット、記憶を失ってしまったって、私がわからないのね」

ミナキはラットを倒せば、記憶が戻りかけるのではないかと思い、

「ラット、私はあなたを元に戻すために倒すわ」

と言って、杖を構えた。

「俺を倒すだと？ ヘッ、たわけたことを」

ラットは森魔法でツルを操った。ツルがミナキに襲いかかってきた。

ミナキは襲いかかるツルにからめとれないよう、杖で叩き折った。

ラットは辺りに散らばったツルの破片を見て、チツと舌打ちをした。

ミナキはウオーターでラットを攻撃したが、ラットには痛くも痒くもなかった。

「ヘッ、効かねえな」

ミナキの魔法の属性はラットの属性である土に弱い水なので、ラットに与えるダメージは通常の半分となるが、ラットは魔王によって、強化されているので、通常の二倍の魔法防御力によって、通常の半分の半分となるので、ミナキの魔法攻撃がラットにとってまったく効き目がないからだ。

「今度は俺の番だぜ」

ラットはアースショットでミナキを攻撃した。

「きゃああああっ！」

ラットは魔王によって、強化されているので、通常の二倍の魔力とラットの魔法の属性はミナキの属性である水に強い土なので、通常の二倍、ミナキに与えるダメージは通常の四倍となり、ミナキは大きなダメージを受けた。

「だから言っただろ？ おめえに俺は倒せねえよ。おめえとは強さが違うんだよ」

倒れたミナキは地面に手をつき、何とか立ち上がったが、ラットに負わされたダメージが大きすぎるので、すぐに膝をついてしまった。

「っ、強い。ラ、ラットの言うとおりだわ」

「わかったか。おめえは俺を倒せず、ここで俺に殺されるのだ」

「くっ」

ミナキは立ち上がろうとしたが、立ち上がれない。

「ここまでだな。止めを刺してやるぜ」

ラットが落とした弓を拾い、懐から妖魔の短剣を取り出そうとした瞬間、空に浮かぶ月の光がミナキを照らした。

「な、何い」

ミナキの傷がみるみる治っていく。スターの月魔法、ムーンライトヒールだ。

(こ、これは、スターの月魔法。スター、私を助けてくれているのね)

ミナキはスターのためにもここでラットに殺されるわけにはいかないと思い、立ち上がった。

「月がおめえの傷を回復するとは一体」

「月が私に味方をしてくれているのよ。あなたを倒すためにね」

「何い」

「ラット、魔界の四天王であるあなたをこのままにしておけない」

ミナキはラットを睨みつけた。

ミナキに睨まれたラットは一瞬怯んだが、妖魔の短剣があれば、ミナキはすぐに殺せると思い、ニヤリと笑った。

ミナキは自分の魔法の属性がラットの魔法の属性である土に弱い水であることに気づき、魔法ではラットを倒すのは不可能だと判断した。では、どうすればいいのか。考えていると、幻獣界でパトモスに言われたことを、ミナキはふと思いつ出した。

——人間界で何かあれば、召喚魔法を使って、幻獣を呼びなさい——
(そうだわ。召喚魔法を使って、幻獣を呼び出せば、ラットを倒せるかもしれない)

幻獣界の幻獣の攻撃は相手の防御力を無視して、相手にダメージを与えるので、魔王によって、強化されているラットの通常の二倍の防御力でも無視することにより、ラットにダメージを与える。ミナキの思いとおりになるかもしれない。

「幻獣キマイラ召喚」

ミナキは召喚魔法を使って、幻獣界からキマイラを召喚した。獅子の頭と前足、山羊の頭と後

ろ足と胴、蛇の尾を持つ、双頭の火を吐く幻獣である。

「な、何だ」

ラットはミナキが召喚魔法を使って、幻獣界の幻獣を呼び出したことに驚いた。

「ラット、幻獣と一緒になら、魔王によって、強化されているあなたと対等に戦えるわ」

ミナキはそう言うと、ふふっと笑った。

「ふん、魔界の四天王の一人であるこのラットを甘く見るなよ」

ラットは森魔法でツルを操った。ツルがキマイラに襲いかかってきた。

キマイラは襲いかかるツルにからめとられる前に、双頭の火を吐いて、迎撃した。

「何い」

「キマイラ、ラットを攻撃して」

キマイラは双頭の火を吐いて、ラットを攻撃したが、ラットは持ち前の素早さを活かしてかわした。

「くらえ」

ラットはアースショットでミナキとキマイラを攻撃した。

「幻獣カーバンクル召喚」

ミナキは召喚魔法を使って、幻獣界からカーバンクルを召喚した。額に輝くような赤い石がある幻獣である。

カーバンクルは額にある輝くような赤い石からリフレクトの効果がある光を放ち、ミナキとキマイラを包み込むと、幻獣界に戻るため、姿を消した。

ラットのアースショットは反射してラットに向かったが、ラットは持ち前の素早さを活かしてかわした。

「くっ、魔法を反射する光か」

「そうよ。これでしたらくあなたのような大きなダメージを受けた魔法を受けなくて済むわ」

「魔法がダメなら、切りつけてやる」

ラットは腰に差してあった鞘から短剣を抜き、ミナキとキマイラに襲いかかった。

キマイラは双頭の火を吐いて、迎撃したが、ラットは持ち前の素早さを活かしてかわし、ミナキとキマイラに切りつけた。

「くっ」

ミナキは杖でキマイラは蛇の尾でラットに切りつけられながらも、攻撃するが、ラットは持ち前の素早さを活かしてかわし、ミナキとキマイラに切りつけた。

「へっ、ノロインだよ」

「くっ、ラットの速さについていけない」

ミナキとキマイラの体は切り傷だらけになり、ボロボロの状態になった。ラットは魔王によって、強化されているので、通常の二倍の攻撃力を持っている。このため、ミナキとキマイラがラ

ツトから受けるダメージは大きい。

ミナキが地面に膝をつき、キマイラが地面に座り込むと、空に浮かぶ月の光がミナキとキマイラを照らした。ミナキとキマイラの傷がみるみる治っていく。スターの月魔法、ムーンライトヒールだ。

「ありがとう。スター」

ミナキはスターに礼を言うと、キマイラと立ち上がった。

(そろそろ妖魔の短剣で殺してやる)

ラットはそう思うと、右手で持っていた短剣を腰の鞘に収め、懐から妖魔の短剣を取り出した。

「あ、あれは、オリビアさまの命を奪った短剣。ラットが私の背後から短剣を投げつけたのね」

ミナキは妖魔の短剣を見て言った。オリビアの命を奪った妖魔の短剣の持ち主がピーターだったとは信じられなかった。

「これは妖魔の短剣。魔王から授かったものだ。おめえを殺すためにな」

「何だって」

「この妖魔の短剣は弓で矢の代わりに飛ばして、相手に命中させると、相手を即死させられる効果がある」

ラットはミナキに向けて弓を構えた。

「身を挺して私を救ってくれたオリビアさまのためにも私はあなたに殺されるわけにはいかな

い」

「へッ、よけられねえよ」

ラットは妖魔の短剣を矢の代わりに弓で飛ばして、ミナキを殺そうとしている。キマイラがそうはさせないと言わんばかりに、双頭の火を吐き、ラットを攻撃した。ラットは持ち前の素早さを活かしてかわすと、

「邪魔をするところだぜ」

と言って、森魔法でツルを操った。ツルがキマイラに襲いかかってきた。

キマイラは襲いかかるツルにからめとられる前に、双頭の火を吐いて、迎撃したが、ラットが妖魔の短剣を手にしたことで、ラットの魔法の能力が大幅に上がったため、ツルは太く巨大なツルとなり、双頭の火をかわして、キマイラの全身を締めとり動きを封じた。

「キマイラ」

キマイラはツルを引きちぎろうともがくが、ツルは太く巨大なためびくともしない。

「死ねえ！」

ラットはミナキに向かって弓を引いて妖魔の短剣を離れた。妖魔の短剣がミナキに向かって飛んで行く。

ミナキは杖を構えた。

「どうするつもりだ」

「やああああっ！」

ミナキは飛んでくる妖魔の短剣をタイミングを合わせて杖を振り下ろし叩き落とした。ミナキに叩き落された妖魔の短剣は地面を回転しながら転がった。

「な、何い」

妖魔の短剣がラットの手を離れたことにより、キマイラの動きを封じていた太く巨大なツルは元の太さと大きさに戻ってしまい、キマイラに引きちぎられた。

「し、しまった」

「キマイラ」

動けるようになったキマイラはミナキの杖に向かって双頭の火を吐き、火を宿らせると、幻獣界に戻るため、姿を消した。

「な、何だ」

ラットはキマイラがミナキの杖に向かって双頭の火を吐き、火を宿らせたことに驚いた。

「キマイラ、力を貸してくれてありがとう。ラット、この一撃であなたを倒す！」

「うっ！」

ミナキはラットに向かって走り出し、

「ラット、目を覚ませよ！」

と言って、ラットに杖を振り下ろした。

「うわああああっ！」

ラットは持ち前の素早さを活かしてかわす間もなくミナキの杖の打撃を受けて吹っ飛び、近くにあった木にぶつかって倒れた。

キマイラが吐く双頭の火はラットの属性である木に強い火であること、ラットは魔王によって強化されているので、通常の二倍の防御力であるが、幻獣界の幻獣の攻撃は相手の防御力を無視すること、これらの条件がミナキにとって好条件となり、ミナキはキマイラの力を借りたことで、ラットを倒すことができたのだった。

「ラット！」

ミナキがラットを抱えると、

「ミ、ミナキ」

ラットはミナキを名前で呼んだ。

「ラット、私の名前で呼んでくれたのね」

「お、俺はラットではない、ピ、ピーターだ」

この時名前はピーターに戻った。

「ピーター」

「ミ、ミナキ、お、俺は」

「ピーター、あなたは魔王に洗脳されていたのよ」

「お、おめえを殺そうとしていたとは」

「魔王の命令でしていたことで、あなたの意思でしていたことではないわ」

「ミ、ミナキ、お、おめえはお、俺のおさなじみ。小さい頃からリディアでよく遊んでいた」

ピーターが良心を取り戻した。魔王に消された記憶が戻りかけている。

「そうよ。ピーター」

ミナキはピーターが元に戻ったことを喜んだ。

「つつ」

ピーターの森魔法が解けたことにより、スターの両手と両足をからめとっていたツルが解けてリブナの森の奥へと去って行ったので、宙に浮いていたスターは地面に落下した。

「くっ」

スターが地面に手をついて起き上がろうとすると、リスは心配そうにスターを見つめた。

「大丈夫よ、リス」

スターが起き上がると、リスはスターの肩に飛び乗った。

(私がこうして動けるようになったのは、ミナキがラットを倒して、ラットの森魔法が解けたからだわ)

スターはそう思うと、落とした剣を拾い、ミナキとピーターがいる場所へと向かった。

スターがミナキとピーターがいる場所へと向かっている途中、アマウスは意識を取り戻して立

ち上がった。

(こんな所で倒れているわけにはいかない。姉貴の敵討ちだ)

アマウスはそう思うと、オリビアの命を奪った妖魔の短剣の持ち主を倒すべく突き進んだ。

(ここで見張りをしていたリブナ兵はピーターが森魔法で操ったツルに絞殺されたのね。ピーターは魔王に洗脳されていたとはいえ、何ということ)

スターがピーターのことを思いながら歩いていると、前方にアマウスが歩いているのが見えた。

「アマウスさま！」

「スター！」

スターに呼びかけられ、アマウスが振り向くと、スターはアマウスに駆け寄り、アマウスと合流した。

「アマウスさま」

「スター、ここで何が起きているのかわかったのか」

「ええ。ミナキとここに潜んでいた魔界の者に遭遇してわかったわ」

「何だって。やはり魔界の者がここに潜んでいたのか。どうしてスターはここにひとりいるのだ。」

ミナキと魔界の者はどこにいるのだ」

「ここで魔界の者とはミナキと一緒に戦おうとしたのだけど、魔界の者に動きを封じられて、ミナキが私を巻き込みたくないと私から遠く離れて一対一で戦って」

「そうだったのか」

「アマウスさま、行きましょう。ミナキと魔界の者がいる場所へ」

「ああ」

（魔界の者って、ミナキのおさなじみのピーターだったのよね。アマウスさまにミナキと事情を話さなければならぬわね）

スターはそう思うと、アマウスとミナキとピーターがいる場所へと向かった。

ミナキは立ち上がれないピーターを抱えていた。

「ミナキ、俺はおめえにすまねえことをしてしまったな」

「スターに月魔法で回復してもらおう」

「おめえだけではなく、スターにもすまねえことをしてしまったな」

「スターはピーターが私と戦う前に魔王に洗脳されていたことに気づいたから、私と同じように

「魔王の命令でしてしまったこと」と言ってくれるわ」

「そ、そうだと良いが」

（アマウスさまはオリビアさまの命を奪った妖魔の短剣の持ち主がピーターだったということを知ったらどうするだろうか）

ミナキはふと思った。アマウスにとつて、ピーターはオリビアの敵討ちとなる。アマウスは「姉貴の仇だ」と言ってピーターを殺そうとするだろう。

スターとアマウスがミナキとピーターに駆け寄った。この時アマウスは落ちていた妖魔の短剣を見つけた。

「こ、これは、姉貴の命を奪った短剣ではないか」

アマウスが落ちていた妖魔の短剣を拾いあげた時、ピーターの腰に差してある短剣が目にとまった。

アマウスはピーターの武器が短剣であることから妖魔の短剣の持ち主はピーターだとわかった。ピーターを睨みつけると、

「姉貴の仇だ！ 死ぬ！」

と言って、ピーターに飛びかかり、妖魔の短剣を振り下ろした。

「アマウスさま！」

「うっ！」

ピーターは殺される。そう思って目を閉じた。

「やめてください！」

ミナキが叫ぶと、アマウスは振り下ろす腕をピタツと止めた。

「ミナキ、どうして止めるのだ！ こいつは姉貴の仇なのだぞ！」

「アマウスさま、落ち着いてください。ピーターを殺しても、オリビアさまは生き返りません。敵はピーターではなく、魔王です」

「どういことだ」

アマウスがミナキに問い詰めると、

「ピーターはミナキのおさななじみで魔王に洗脳されて、魔界の四天王となっていたのです」

スターはアマウスに事情を話した。

「何だって、それは本当か？」

「はい。だから私が魔王に洗脳されたピーターを元に戻したのです」

ミナキはアマウスに事情を話した。

「そうだったのか」

アマウスは納得し、立ち上がれないピーターを抱えるミナキの姿を見て、心を落ち着かせた。

「スター、月魔法でピーターを回復させてあげて」

「わかったわ」

スターは月魔法、ムーンライトヒールを唱えると、空に浮かぶ月の光がピーターを照らした。

ピーターの傷がみるみる治っていく。

「ありがとう、スター」

ピーターは立ち上がった。

「ピーター、元に戻って良かったわ」

「スター、俺はおめえにすまねえことをしてしまった」

「魔王の命令でしてしまったことよ」

ミナキに言われたことを、ピーターはふと思い出した。

——スターはピーターが私と戦う前に魔王に洗脳されていたことに気づいたから、私と同じように「魔王の命令でしてしまったこと」と言ってくれるわ——

(ミナキの言ったとおりだった)

ピーターはそう思った。

リスがスターの肩からミナキの肩に飛び移った。

「リス、スターを見守ってくれて、ありがとう」

ミナキがリスの頭を撫でると、リスはミナキの顔をペロツと舐めた。

しばらくしてからピーターはミナキ、スター、アマウスにこれまでの経緯を話した。

「俺は七年前に世界の森を巡る旅に出た。道中、俺は魔界のベリアルに声をかけられたのだ」

「何だって」

「人間界の人間にしては、高い魔力を持っているな。気に入った。魔界の四天王として、魔界のために人間界の人間と戦ってくれないか」と言われたのだ」

「人間界の人間であるピーターに対して、何ということを」

「もちろん、俺は断った。だが、ベリアルに気絶させられて、それから」

「魔界に連れて行かれて、魔王に洗脳されたということね」

「ああ」

「どうしてリブナの森にいたの？」

ミナキが訊ねると、

「俺はミナキを殺せと魔王に命令されて、おめえを探していた。ここにいと、おめえが立ち寄るだろうと思っていたからだ」

ピーターは答えた。

（ピーターは魔王にミナキを殺せと命令されたから、ミナキの背後から姉貴の命を奪った短剣を投げつけたのか。ピーターが魔王に洗脳されていなければ、姉貴が死ぬことはなかったのだ）

アマウスはそう思うと、魔王に対して、憤りを感じた。

「すまない！」

ピーターはミナキ、スター、アマウスに魔王に洗脳されて、魔界の四天王となつてしまい、リブナ帝国のリブナ兵を何人も殺してしまったこと、ミナキを殺そうとしてしまったこと、スターとアマウスに酷い目に遭わせてしまったことを詫びた。

「魔王、許さない！」

ミナキはスター、アマウスと魔王を憎み、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授かり、必ず倒すことを決意した。

「おめえらと魔王を倒す」

「ピーター」

「人間界の人間である俺を洗脳して、魔界のために人間界の人間と戦わせた魔王を許すわけにはいかないぜ」

ピーターはアマウスから妖魔の短剣を取り上げた。

「ピーター、何を？」

アマウスが訊ねると、ピーターは妖魔の短剣を懐に入れ、

「魔王はこの妖魔の短剣で倒します。それまではここに入れておきます」と答えた。

「妖魔の短剣で魔王を倒すの？」

ミナキが訊ねると、

「ああ。この妖魔の短剣を持っていると、魔力が上がる。魔王の魔力は絶大だ。魔王と戦うには魔力を上げないと勝ち目はねえからな」

ピーターは答え、魔王を妖魔の短剣で倒すことを決意した。

「おめえたちと一緒に行くぜ」

ピーターはミナキ、スター、アマウスに同行した。

「ミナキ、スター、ピーター、城に戻ろう。父上にここで起きていたことを話さなければならぬいからな」

「そうですね」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターが城に戻る頃には、もうすっかり暗くなっていた。

ミナキ、スター、アマウス、ピーターがクリスタル皇帝城へ入り、クリスタルがいる皇室に向かうと、クリスタルがピーターを見て、

「おまえは誰だ？」

と訊ねた。

「ピーターと申します」

ピーターは答えた。

「ピーターか」

「クリスタルさま、ピーターは私のおさななじみです」

「ミナキのおさななじみか」

「はい」

「父上、リブナの森で起きていたことを話すよ」

アマウスがクリスタルにリブナの森で起きていたことを話すと、ピーターはクリスタルに一礼し、

「クリスタルさま、俺いや私がリブナの森でリブナ兵を何人も殺して、ミナキを殺そうとして、オリビアさまを殺してしまいました」

とリブナ帝国での悪行を詫びるため話した。

「な、何だと！ では、おまえはリブナの森に潜んでいた魔界の者だったということか！」

「はい。すみませんでした」

ピーターがクリスタルに詫びると、

「おのれ！」

クリスタルはピーターに怒りをぶつけ、ピーターの胸ぐらをぐつつかんだ。

「ううっ」

クリスタルに胸ぐらをぐつつかまれたピーターは苦しそうにしていた。

「父上、やめてくれ」

「アマウス、どうして止めるのだ！ こいつはリブナ帝国の敵だったのだぞ」

「魔王に洗脳されて、仕方なくしたことだ」

「何だと」

「だから、やめてくれ」

クリスタルがつかんだピーターの胸ぐらを離し、

「アマウス、ピーターは魔王に洗脳されていたというのか？」

と問いただすと、アマウスは頷いた。

「そうだったのか」

こうしてアマウスはクリスタルの怒りを鎮めた。

「魔王め！ 人間界の人間であるピーターを洗脳し、人間界の人間を殺させるとは」
クリスタルはそう言うと、魔王に対して、憤りを感じた。

「クリスタルさま、これからは人間界の人間のために魔界と戦います」
ピーターはクリスタルにそう誓った。

クリスタルがミナキを見て、

「ミナキ、人間界の平和のためにラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、
聖剣アドラミティオンを授かり、魔界の魔王を倒してくれ」

と言うと、ミナキは、

「はい。必ず倒します」

と言った。

「アマウス、ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者として、ミナキに同行しなさい」

「はい、父上」

「アマウスさま」

「ミナキ、一緒に魔王を倒しに行こうぜ」

「はい」

こうしてアマウスはラエティアからナチュラルストーンを授かる者として、ミナキたちと一緒に

に魔王を倒しに行くことになった。

「クリスタルさま、それでは、行きます」

「父上、行って帰って来ます」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターが発砲の挨拶をして、皇室を出ようとする、クリスタルに「待ちなさい」と呼び止められた。

「何でしょう、クリスタルさま」

「戦いの後で疲れているだろう。休んで行きなさい」

クリスタルがそう言って、ミナキ、スター、アマウス、ピーターを氣遣った。

「ありがとうございます、クリスタルさま」

「ミナキとピーターはオリビアの部屋で、アマウスとスターはアマウスの部屋で休みなさい」

「わかりました」

ミナキとピーターはオリビアの部屋に、アマウスとスターはアマウスの部屋に向かった。

オリビアの部屋に入ったミナキとピーターは久々の再会で積もる話をした。

「七年前、リディアの森の薬草を摘みに同行してくれて、ありがとう。おかげでお母さまの傷は完治したわ」

「おめえのお母さんの傷が治って良かったぜ」

「ええ。ピーターのおかげよ。スターの回復魔法だけでは傷の治りが遅かったからね」

「俺が世界の森を巡る旅に出てから何か変わったことがあったのか？」

「ええ。私、お母さまと人間界から幻獣界に移住したの」

「幻獣界っておめえのお母さん、人間界の人間ではなかったのか？」

「ええ。私は人間界の人間ではなく、人間界の人間と幻獣界の幻獣の混血児だったの」

「そうだったのか。だからおめえは幻獣界の幻獣を人間界に呼び出すことができるのだな」

「ミナキは頷いた。」

「お母さまと幻獣界に住むようになってから幻獣界の幻獣のことを知って、リス以外の幻獣界の幻獣を人間界に呼び出すことができるようになったのよ」

「七年前のおめえはリスしか人間界に呼び出すことができなかつたよな」

「ええ」

「成長したな、ミナキ」

「ピーターこそ。世界の森を巡る旅に出てから森魔法が七年前より強くなったじゃない」

「容姿はぜんぜん変わっていないけどな」

「そうね、久しぶりに会った時、すぐにわかったわ」

「そうだろ？」

「ピーターはヘツと笑った。」

「ふふ」

ミナキと積もる話をしていると、七年前にミナキに言われたことを、ピーターはふと思い出した。

——ピーター、森魔法を使って、私とこのリディアの森を立派な森にしよう——

「ミナキ、魔界との戦いが終われば、リディアに帰ろうな」

「ええ」

「森魔法を使って、おめえとリディアの森を立派な森にするのだ」

「ピーター、七年前に私が言ったこと、覚えていてくれたのね」

「ああ。強くなりたいためだけでなく、そのためにも俺は世界の森を巡る旅に出て、森魔法の修行をしたのだからな」

「ピーター」

「ミナキ、人間界のために魔王を倒そうな」

「ええ、ピーターとリディアに帰るためにもね」

「ミナキ」

ミナキとピーターが積もる話を終えると、リスはミナキの肩からベッドに飛び移り、丸くなって、眠りについた。

「ピーター、休もう」

ミナキはそう言うと、杖を壁に立てかけ、ベッドに横たわり、眠りについた。

ピーターは大好きなミナキとベッドで一緒に寝たかったが、シャイなので、ミナキが眠りについてから弓を壁に立てかけ、ベッドの傍らに横たわり、眠りについた。

アマウスとアマウスの部屋に入ったスターは剣を壁に立てかけた。

アマウスはしばらく何も話さないまま、窓から外の夜の景色を眺めていた。

「アマウスさま、何を見ていらつしやるのですか」

スターがアマウスに近寄ると、アマウスは見ているものを指さして、

「城下町だ。翌朝、城を出てから城下町の墓地で姉貴が眠る墓前に手を合わせようと思ってな」と言った。

スターはアマウスと一緒にクリスタル皇帝城の城下町を見ると、

「それはいいですね。オリビアさまはアマウスさまを見守っていらつしやいます」と言った。

「きみも一緒に手を合わせてくれないか」

「もちろんです。私だけではなく、ミナキとピーターも一緒にします」

「ピーターには姉貴を殺した罪を償って欲しい」

「アマウスさま、オリビアさまを殺したのはピーターではなく魔王です」

「いや、ピーターが魔王に洗脳されていたからと言って、姉貴を殺したのはピーターだ」
「アマウスさま」

「スター、休もう」

アマウスはそう言うと、スターとベッドに横たわり、眠りについた。

翌朝、ミナキとピーターがオリビアの部屋から出て、スターとアマウスがアマウスの部屋を出て、合流し、クリスタルがいる皇室に向かうと、クリスタルがミナキ、スター、アマウス、ピーターを見て、

「みんな、よく休めたか」

と声をかけた。

「はい」

「それは良かった」

「クリスタルさま、それでは、行きます」

「父上、行つて帰つて来ます」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターは出発の挨拶をした。

「行きなさい。アマウス、無事に帰つて来ることを祈っているぞ」

「父上」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターはクリスタル皇帝城を出た。

「ミナキ、ピーター、城下町の墓地で姉貴が眠る墓前に手を合わせてくれないか」

「わかりました」

「もちろんです」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターはクリスタル皇帝城の城下町の墓地に向かった。

クリスタル皇帝城の城下町の墓地のオリビアが眠る墓石にはオリビアの武器・装身具が飾られ、大きく名前が刻まれている。

「オリビアさま」

「姉貴」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターは墓前に手を合わせた。

（オリビアさまが死んでしまったのは俺のせいだ。俺が魔王に洗脳されなければ、オリビアさまは死ぬことはなかった。俺はオリビアさまを殺した罪を償わなければならない。そのために魔王を妖魔の短剣で刺し違えてでも倒す）

ピーターはそう思うと、オリビアを殺した罪を償うことを決意した。

「アマウスさま、俺はオリビアさまを殺した罪を償います」

「ピーター、おまえが姉貴を殺した罪を償えば姉貴はおまえを許すだろう」

「はい、命に代えましても」

「ピーター、そこまでしなくても。オリビアさまを殺したのはあなたではなく、魔王なのよ」

「ミナキ、俺が魔王に洗脳されていたからと言っても、オリビアさまを殺したのは俺だ。魔王ではない」

「よく言った、ピーター」

「アマウスさま、オリビアさまが死んでしまったことについては私のせいでもあります。だから私も」

「ミナキ、おめえはいい」

「そんなことないわ。オリビアさまは私をかばったのよ。かばわなければ死ぬことはなかったわ」
「俺が妖魔の短剣をおめえに投げつけなければ、オリビアさまはおめえをかばうことはなかったのだ」

「ピーター」

「ミナキ、ピーター、魔王を倒せば、オリビアさまは喜ばれる。だからミナキは魔王を倒すためにラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授かるのよ。ピーターはミナキのために力を貸してあげて」

ミナキとピーターは頷いた。

「さあ、魔王を倒しに行きましょう」

ミナキはスター、アマウス、ピーターとクリスタル皇帝城の城下町の墓地を後にし、リブナ帝国を出た。

リブナ帝国を出たミナキ、スター、アマウス、ピーターはラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探すため、リブナ帝国から南に向かって歩いていった。

ピーターはミナキを見ると、

「なあ、ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者はどうやって見つけるのだ？ こうして歩いていても見つからないだろう。大丈夫なのか」と、心配そうな顔で言った。

「大丈夫よ、ピーター。ねえ、スター」

「ええ、ナチュラルストーンが見つけてくれるからね」

「本当か、スター」

「本当だ、ピーター。父上から聞いたことだ。ミナキとスターがリブナ帝国に来る前にナチュラルストーンが共鳴して強く光ったことで、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者である私を見つけたのだ」

「アマウスさま、そうでしたか」

ピーターはアマウスが言ったことが本当なら、大丈夫だと確信した。

ミナキ、スター、アマウス、ピーターがしばらく歩いていると、ミナキ、スター、アマウスのナチュラルストーンが共鳴して強く光った。

「これは」

ミナキとスターが口を揃えて言った。

「見ろ、ミナキ」

ミナキがアマウスの指した方向を見ると、リブナ帝国から遠い位置にあるルビーレッドからミナキ、スター、アマウスのナチュラルストーンが共鳴して強く光った光と同じ光が輝いている。

「アマウスさま、ナチュラルストーンの光が輝いていますね。ラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいますよ」

「きつとそうだな」

「すげえ」

ピーターが共鳴して強く光ったミナキ、スター、アマウスのナチュラルストーンを見て、驚いて言った。

「行きましょう、スター、アマウスさま、ピーター」

「ええ」

「よし」

「ああ」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターはナチュラルストーンの光の導きにより、ルビーレッドを指した。

ミナキ、スター、アマウス、ピーターがしばらく歩いていると、前方に山道が見えてきた。
「山道だわ」

ルビーレッドに通じるマウリル山道である。

「どうやらここを通らないと先に行けないようね」

「そのようだな」

「ここで立ち止まるわけにはいかないな」

「行きましょう、スター、アマウスさま、ピーター」

「ええ」

「よし」

「ああ」

ミナキ、スター、アマウス、ピーターはマウリル山道に足を踏み入れた。

「険しい山道ね」

「俺が先頭を歩こう。おめえたち三人を危険な目に遭わせるわけにはいかねえからな」

ミナキ、スター、アマウスの後方にいたピーターはそう言うと、ミナキ、スター、アマウスの前方に移動した。

(ピーター、頼もしいわね)

ミナキは先頭を歩くピーターの後ろ姿を見て、そう思った。

ピーターは振り向くと、

「さあ、行こうぜ」

と言って歩き始めた。

「ピーターに続きましょう。スター、アマウスさま」

「ええ」

「ああ」

ミナキ、スター、アマウスはピーターに続いて歩き始めた。

しばらく歩いていると、道を塞ぐ大きな岩に遭遇した。

「このままでは通れないわね」

「みんなで持ち上げようとしても、重すぎて持ち上がらないわね」

「この岩をどかすことができれば、通れるのにな」

ミナキ、スター、アマウスが困った表情を言うと、ピーターは、

「俺に任せてくれ」

と言った。

「ピーター」

「俺の森魔法でこの岩をどかしてやるさ」

ピーターはそう言うと、森魔法でマウリル山道の樹木を操った。地面から太くなった根が出てきて岩を掴み、持ち上げてどかした。

「すごい、ピーター！」

ミナキはピーターの森魔法が七年前より強くなったと実感した。

ピーターの森魔法は魔王によって、強化されていたが、ミナキが魔王に洗脳されたラットを元のピーターに戻したことで、魔王の洗脳が解け、本来の強さに戻っている。だが、本来の強さは魔王によって、強化されていた強さに勝るとも劣らない。七年前に世界の森を巡る旅に出たピーターは道中、ベリアルに「人間界の人間にしては、高い魔力を持っているな」と言われた。なぜなら森魔法の修行の成果だからである。

「ミナキ、これが俺の森魔法の修行の成果だ」

「ピーター、七年前とは比べ物にならないくらい強くなったわね」

「おめえも七年前とは比べ物にならないくらい強くなったよ」

「私だって七年前とは比べ物にならないくらい強くなったわよ。魔法が使えるようになったからね」

「私もスターもピーターも七年前とは比べ物にならないくらい強くなったよね」

「ええ」

「ああ」

ミナキ、スター、ピーターがおさななじみ会話をしていると、アマウスは笑みを浮かべながら聞いていた。

しばらくしてから、ピーターは、

「さあ、行こうぜ」

と言って歩き始めた。

「ピーターに続きましょう。スター、アマウスさま」

「ええ」

「ああ」

ミナキ、スター、アマウスはピーターに続いて歩き始めた。

しばらく歩いていると、行く手を阻んでいる二匹の翼竜が見えた。炎を吐くブレス攻撃をするブルードラゴンだ。

「モンスターか」

「倒さなければ、先に進めないということね」

「戦うしかないようね」

「みんなで倒そうぜ」

ミナキが杖を、スターが剣を、ピーターが短剣を、アマウスが素手で構えると、レッドドラゴンとブルードラゴンは前方からミナキ、スター、ピーター、アマウスに襲いかかかってきた。

レッドドラゴンが炎の息を吐くと、ミナキはウオーターで迎撃した。

「火には水ね」

ブルードラゴンが吹雪の息を吐くと、ピーターはアースショットで迎撃した。

「水には土だな」

ミナキとピーターの攻撃魔法を受け、怯んだレッドドラゴンとブルードラゴンにスターは剣で、ピーターは短剣で切りつけたが、皮膚が硬いので大きなダメージは与えられなかった。

「くっ」

「ダメか」

レッドドラゴンとブルードラゴンは尻尾でミナキ、スター、ピーターを攻撃した。

「あっ」

「きやっ」

「うっ」

ミナキ、スター、ピーターは吹っ飛び、倒れた。

「ミナキ、スター、ピーター、大丈夫か」

アマウスが心配して、倒れているミナキ、スター、ピーターに駆け寄ろうとすると、レッドドラゴンとブルードラゴンは背後からアマウスに襲いかかってきた。

「ア、アマウスさま、危ない」

ピーターは立ち上がると、森魔法でマウリル山道の樹木を操った。隣り合った樹木の幹や枝が絡まり合い、アマウスを守る木の防壁を作り、レッドドラゴンとブルードラゴンの爪攻撃を防いだ。

「ピーター、ありがとう。助かったよ」

アマウスが礼を言うと、ピーターは、

「オリーブアさまのためにも、あなたを死なせるわけにはいきませんから」

とアマウスに妖魔の短剣でオリーブアを殺してしまった罪を償うために言った。

「ピーター」

「ミナキ、こいつらは武器では倒せない。魔法攻撃で弱点を突いて倒そう」

レッドドラゴンは火の属性なので、水の属性に弱い。ブルードラゴンは水の属性なので、土の属性に弱い。ミナキが水の属性の攻撃魔法でレッドドラゴンを、ピーターが土の属性の攻撃魔法でブルードラゴンに攻撃すれば、大きなダメージを与えられると思った。ピーターはミナキにそう言った。

「ええ」

ミナキは立ち上がると、ピーターと肩を並べた。

レッドドラゴンとブルードラゴンがミナキとピーターに襲いかかってきた。

「行くぜ、ミナキ」

「ええ、ピーター」

ミナキはウォーターでレッドドラゴンを、ピーターはアースショットでブルードラゴンを攻撃した。

レッドドラゴンとブルードラゴンはミナキとピーターの魔法攻撃をまともに受けてしまい、大きなダメージを受けて倒れた。

「やったわ、ピーター」

「ああ」

レッドドラゴンとブルードラゴンを倒してミナキとピーターが喜んでいるのを見て、ミナキの肩に乗っているリスが尻尾を振った。物事がうまくいって、嬉しそうだ。

「スター、手を」

「ありがとうございます、アマウスさま」

スターはアマウスに手を引かれて立ち上がると、

「ミナキ、ピーター」

と言って、アマウスと一緒にミナキとピーターに駆け寄った。

「スター、アマウスさま」

「さあ、行こうぜ」

ピーターを先頭に、ミナキ、スター、アマウスが後に続いた。

しばらく歩いていけると、前方にルビーレッドが見えてきた。

「あそこにラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいるわ」

ミナキがルビーレッドを指差して言った。

「そうだとすると、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者が四人揃うことになるわね、ミナキ」

「ええ、スター。もうすぐこの山道を抜けるわ。スター、アマウスさま、ピーター、行きましょ
う」

ミナキはスター、アマウス、ピーターはルビーレッドに通じるマウリル山道を抜けて行った。

ミナキ、スター、アマウス、ピーターがルビーレッドに通じるマウリル山道を抜けて、ルビーレッドに足を踏み入れると、前方から誰かが歩いてくるのが見えた。

「よく来たわね。私はルビー・ワインレッド」

歩いて来たのは、ここルビーレッドに住むルビー・ワインレッドだった。

「ルビーね。私は」

ミナキがルビーに名乗ろうとすると、ルビーは、

「ミナキ」

と言った。

「えっ？ 私の名前がわかったの？」

ミナキはルビーに名乗っていないのに、ミナキと名前を呼ばれて驚いた。

「ええ」

ルビーはスターを見ると、

「スター」

と言った。

「えっ？ 私の名前もわかったの？」

スターはルビーに名乗っていないのに、スターと名前を呼ばれて驚いた。

「ええ」

ルビーはアマウスを見ると、

「アマウスさま」

と言った。

「はあ？ 私の名前もわかったのか？」

アマウスはルビーに名乗っていないのに、アマウスさまと名前を呼ばれて驚いた。

「はい」

ルビーはピーターを見ると、

「ピーター」

と言った。

「うわー、俺の名前もわかったのか？」

ピーターはルビーに名乗っていないのに、ピーターと名前を呼ばれて驚いた。

「ええ」

「ルビー、どうして、私たちの名前がわかったの？」

「テレパシー、相手の心を読む超能力よ」

「超能力？」

「そうよ」

ルビーは人間の知覚以外の力、テレパシー・テレキネシス・テレポーテーションなど、常人にはない力を持つ人間。エスパーである。

「ルビー、私、スター、アマウスさまの三人は」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者でしょ。私もよ」

「あ、テレパシーでわかったのね。ルビーもラエティアからナチュラルストーンを授かる者なの

ね」

「そうよ」

ルビーはラエティアから授かったナチュラルストーンのひとつである『火』のロードライトガネットをミナキに見せた。

「！」

ミナキの『水』のサファイア、スターの『天』のムーンストーン、アマウスの『光』のキャッツアイ、ルビーの『火』のロードライトガネットが共鳴して強く光った。

「これは」

「ラエティアからナチュラルストーンを授かる者が、こうして四人揃ったからだわ」

「すげえ」

ピーターが共鳴して強く光ったミナキの『水』のサファイア、スターの『天』のムーンストーン、アマウスの『光』のキャッツアイ、ルビーの『火』のロードライトガネットを見て、驚いて言った。

「ミナキ、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授からないと、人間界はどうなるか、今から見せてあげるわ」

ルビーは超能力で人間界の未来を予知した。ルビーの背後に魔界の魔王によって、闇に包まれる人間界がうつしだされた。



「魔界の魔王によって、人間界が闇に包まれる」

ミナキはラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授からないと、ルビーが超能力で人間界の未来を予知したとおり、人間界が魔界の魔王によって、闇に包まれることを知った。

「ミナキ、俺がベリアルに魔界に連れて行かれた時にわかったことだ。魔界ではサタンからブラックストーンを授かる者を揃えて、ベルゼブルの魔剣を授かるベリアルが始動している。サタンを倒す前にまずベリアルを倒さないとダメだ。そのためにもラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授からないと、ベリアルはおろかサタンは絶対に倒せねえぜ」

「ピーター」

「ピーターの言うとおりよ。ミナキ、何もしなければ、私が超能力で人間界の未来を予知したとおり、魔界の魔王によって、人間界が闇に包まれる」

「ルビー」

「ミナキ、スター、アマウスさま、ピーター、私も行くわ。ミナキ、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、聖剣アドラミティオンを授かるのよ。一緒に魔王を倒しましょう」
こうしてルビーはラエティアからナチュラルストーンを授かる者として、ミナキたちと一緒に魔王を倒しに行くことになった。

第四章

ルビーレッドを出たミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探すため、ルビーレッドから西に向かって歩いていった。だがミナキ、スター、アマウス、ルビーのナチュラルストーンは共鳴して強く光らない。

「ナチュラルストーンの光が輝かないわね。ここにはラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいないということね」

ミナキが残念そうな顔をしてそう言うと、ピーターは、

「残念そうな顔をするなよ。みんなで探せば絶対に見つかるさ」

と言って、励ました。

「そうね。ピーター」

残念そうな顔をしていたミナキは笑顔に戻った。

「ルビー、超能力でラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいる場所を知ることではないの？」

スターはルビーに人間界の未来を予知したルビーの超能力なら、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいる場所を知ることができるのではないかと推測して訊ねたが、

「残念ながら無理ね。みんなで探さなければならぬわ」

ルビーはできないように、スターにそう答えた。

「そうなのね」

スターはがっかりした。

「スター、ルビーの超能力でナチュラルストーンを授かる者がいる場所を知ることができないなら、みんなで探すしかないよ」

アマウスがスターを説得すると、

「そうですね、アマウスさま」

スターがそう言って、納得した。

「スター、アマウスさま、ピーター、ルビー、ラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探しましょう」

「ええ」

「よし」

「ああ」

「みんなで探しましょう」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探すため、ルビーレッドからさらに西に向かって歩いた。

しばらく歩いていると、洪水によって、壊れた城が見えてきた。ルビーレッドからはるか西のほうにあるシノビ城である。

シノビ城は忍者が住む城で、城主は桜である。桜が流離の旅に出てから、水害に遭ってしまい、崩壊してしまった。その理由は後に明らかになる。

「あの城にはラエティアからナチュラルストーンを授かる者がいないようだけど、どうして洪水が起きて、壊れたのか知りたいから行ってみましょう」

「ええ」

「よし」

「ああ」

「行ってみましょう」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはシノビ城に足を踏み入れた。

水が引いたばかりのシノビ城は粘り気の強い茶色い泥に覆われ、歩くと足を取られる。ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーは足を取られないように気をつけながら城内に入って行った。

城内に入ると、目の前には何人も人が倒れている。

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーが倒れている人たちに近寄り、呼びかけたが、すでに死んでいるので、返事はなかった。

「この人たち、死んでいるわね」

「死因は洪水による溺死ね」

「この人たち、忍び装束を着ているな」

倒れている人たちはここシノビ城の忍者兵である。

城内には洪水により溜まった水が引いていないところがあった。

(どうして洪水が起きたのかしら)

ミナキがそう思いながら、城内を見渡すと、息も絶え絶えになった忍者兵が倒れている。ミナキはスター、アマウス、ピーター、ルビーと忍者兵に駆け寄り、

「しっかりして！」

と声をかけた。

「うう……」

忍者兵は苦しそうなうめき声をあげた。

「スター、回復魔法をかけてあげて」

「……ダメよ、ミナキ」

「どうして？」

「回復魔法はある程度体力が残っていないと効かないからよ」

「……そうなのね」

「こ、ここシ、シノビ城はま、魔界の四天王、ス、スウィーヌによって、ほ、滅ぼされてしまっ
た……」

「何だって？」

ミナキは驚いて言った。

「魔界の四天王、スウィーヌが洪水を起こしてここシノビ城を滅ぼしたということね」

「魔王の四天王め、リブナ帝国に続いてここシノビ城まで襲撃するとは許せない！」

アマウスはそう言うと、魔界の四天王に対して、憤りを感じた。そんなアマウスを見たピーターは何も言えなかった。なぜならリブナ帝国を襲撃したのは魔王に洗脳され、悪の心をうえつけられてしまい、魔界の四天王になってしまった自分だからだ。

「魔界の四天王、スウィーヌとは」

スウィーヌは人間界にある禁断の泉の精霊である。だが、魔王に悪のパワーをうえつけられ、同時に洗脳され、魔界に四天王として呼び寄せられた。ミナキ、スター、アマウス、ルビーはスウィーヌのことをまだ知らなかったが、これから知っているピーターから聞くことになる。

「あ、あなたたちは……？ た、旅をしている者……？」

忍者兵が訊ねると、ミナキは、

「そうよ。私たち、魔王を倒す旅をしている者よ」

と答えた。

「そ……そうか、な、ならば、た、頼みがある。ま、魔界の四天王、ス、スウィーヌをた、倒してくれ……。さ、桜さまにあ、会えたら、シ、シノビ城がめ、滅亡してもい、生きてくださいと伝えて欲しい」

忍者兵はミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーにそう言い残すと息絶えた。

「魔界の四天王、スウィーヌ」

「魔界の魔族であるからには」

「倒さなければならぬ！」

「よし、みんなでスウィーヌを倒すのよ！」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーが魔界の四天王、スウィーヌを倒そうと意気込むと、ピーターは、

「スウィーヌは魔界の魔族ではない。人間界にある禁断の泉の精霊だ。俺と同じように魔王に洗脳され、魔界の四天王になってしまったのだ」

とスウィーヌのことをミナキ、スター、アマウス、ルビーに話した。

「え？ 本当なの？ ピーター」

ミナキが訊ねると、ピーターは、

「ああ」

と答えた。

「スウィーヌはピーターと同じように魔王に洗脳され、魔界の四天王になってしまったということね」

「そういうことだ。スウィーヌを倒せば、精霊に戻るはずだ。魔王に洗脳され、悪の心をうえつけられてしまい、魔界の四天王になってしまった俺がミナキに倒されたことで良心を取り戻したように」

「スウィーヌを探しに行きましょう。倒して、精霊に戻すのよ」

「ええ」

「よし」

「ああ」

「行きましょう」

ミナキはスター、アマウス、ピーター、ルビーとシノビ城を出た。

シノビ城を出たミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはスウィーヌを探すため、シノビ城から西に向かって歩いていった。

「スウィーヌ、どこにいるのかしら」

「探して、倒して、精霊に戻さないといけないわね」

「一刻も早く探して見つけ出さないといけない。次はどこが襲撃されるかわからないからな」

「アマウスさまの言うとおりだ。みんなで一刻も早く探して見つけ出そう」

「そうね」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはスウィーヌを探した。

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーが探しているスウィーヌはここマウン山にいた。

「ミナキ、見つけたわ。私と同じ水の魔法を使う者。魔界のために倒すべき敵よ。ここに来るが良い。葬ってやるわ」

スウィーヌはそう言うと、ミナキに居場所を教えるため、魔法でマウン山を凍らせた。

ミナキはスウィーヌの魔法によって凍りついたシノビ城の向こうに見えるマウン山を見て、スウィーヌの居場所を知ると、

「みんな、見て！ あそこにスウィーヌがいるわ」

とスター、アマウス、ピーター、ルビーにスウィーヌの魔法によって凍りついたシノビ城の向こうに見えるマウン山を指さしながら言った。

「山が凍っているわ」

「あの山にスウィーヌがいるのか」

「スウィーヌは水の魔法を使う。魔法であの山を凍らせた、あの山にいるにちがいない」

「見つけたわね。あの山はマウン山よ。行きましよう」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはスウィーヌがいるマウン山に向かった。

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはマウン山に足を踏み入れた。

マウン山の道は険しく凸凹だったが、ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはそんなことはおかまいなしにどんどん登って行った。

しばらく登って行くと、前方からモンスターが現れた。太くて長い蛇の、頭と尾の部分だけを断ち切ったような、醜い円筒形の姿をしているノヅチである。

ノヅチはごろごろと転がってアマウスを襲った。

「アマウスさま、危ない」

ピーターがアマウスを助けようと左手で持っていた弓を構えると、

「はっ！」

アマウスはノヅチに向かって走り出し拳を叩き込んだ。

「アマウスさま」

「ピーター、おまえに助けてもらってばかりでは悪いらな」

「魔王に洗脳され、俺が妖魔の短剣で殺してしまったオリビアさまのためにも、あなたを死なせるわけにはいきません。だから俺は」

「わかっているよ、ピーター。でも、私だって戦えるんだ」

アマウスがピーターに拳を握り締めファイティングポーズを見せると、ピーターはそれを見て、わかりましたと頷いた。

アマウスに叩き込まれた拳によって、吹き飛ばされたノズチはごろごろと転がってピーターとアマウスを襲った。

「アマウスさま、一緒に攻撃しましょう」

「ああ」

ピーターは腰に差してあった鞘から短剣を抜き、ノズチに切りつけ、アマウスはノズチに蹴りつけた。

ノズチはピーターとアマウスの攻撃を受けて倒れ、動かなくなった。

「やったわね、ピーター、アマウスさま」

ミナキがスター、ルビーと一緒にピーターとアマウスに駆け寄ると、ピーターは右手に持っていた短剣を腰の鞘に収めて、

「ああ、アマウスさまと攻撃したおかげだ」

とアマウスを見て言った。

「そうだな」

アマウスはピーターに笑みを浮かべて言った。

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーが先に進もうとすると、前方からモンスターが現れた。鷲の体にライオンの頭を持つズーである。

「現れたな。くらえ」

ピーターは左手で持っていた弓を構え、ズーめがけて弓を射た。矢は最初はズーめがけて飛んで行くが、ズーが一睨ただけで、変化が起きた。矢の部品である石の鏃は元あった岩の中に帰り、葦でできた矢柄は葦の野原に帰り、羽は鳥の翼に帰って、飛んでいた矢がなくなってしまった。

「ピーターの矢がなくなったわ」

ミナキが驚いて言った。

「何で？」

ピーターが訊くと、ズーのことを知っているルビーは、

「ズーの時間を逆回転する能力よ」と言った。

「時間を逆回転する能力？」

「そうよ。武器で攻撃すると武器がなくなってしまうから、魔法で攻撃しないとイケないわ」
「そういうことか」

「私が魔法でズーを攻撃するわ。ズーは風の属性なので、火の属性に弱いから」
「なるほどね」

「頼んだぜ、ルビー。俺が魔法でズーを攻撃しても、土の属性に強い風の属性のズーにダメージを与えられない。俺の魔法は土の属性だからな」

「任せて、ピーター。私の魔法は火の属性だからね」

ルビーが魔法でズーを攻撃しようとすると、ズーはミナキ、ピーター、ルビーに向かって高速で飛んで来て、爪でミナキ、ピーター、ルビーを攻撃した。

「あっ」

「くっ」

「きゃっ」

ミナキ、ピーター、ルビーは裂傷を負った。

「斬る」

スターが剣を構えてズーに攻撃しようとすると、アマウスはその腕を掴んで、

「ダメだ、スター、武器でズーを攻撃すると、ズーの時間を逆回転する能力でピーターの矢のよ

ように、きみの剣がなくなってしまう」

と止めた。

「そうだったわね。攻撃魔法が使えたら」

「同じく」

攻撃魔法が使えないスターとアマウスはズーに攻撃することができなかった。

ズーは羽ばたきでミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーを攻撃したが、ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーは吹き飛ばされないように踏ん張った。ミナキの肩に乗っているリスは吹き飛ばされないようにミナキの肩にしっかりとつかまっていた。

しばらくすると、ズーの羽ばたきが止んだ。

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはズーの羽ばたきの攻撃に耐えた。

ルビーは飛んでいたズーが着地した瞬間に一瞬の隙をついてファイアでズーを攻撃した。

ズーはルビーの魔法攻撃をともに受けてしまい、大きなダメージを受けて倒れた。

「やったわ、ルビー」

「ルビーに任せて良かったな」

「でしょ？」

「ああ」

「さあ、スイッチヌがいる頂上まで登りましょう」

「よし」

「ああ」

「登りましょう」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはスウィーヌがいる頂上目指して登って行った。頂上まで辿りつくと、周囲は凍りついていた。ここにスウィーヌがいた。

「よく来たわね、ミナキ」

「あなたがスウィーヌね」

「そうよ。私がスウィーヌ。魔界の四天王の一人。魔界のために、おまえを葬ってやるわ」
スウィーヌが魔法でミナキを攻撃しようとすると、ピーターは、

「待て、スウィーヌ」

とスウィーヌを止めた。

「誰かと思えば、魔界の四天王の一人、ラットじゃない。ミナキを殺せず、ミナキに寝返ったというのね」

スウィーヌはピーターの顔を見て言った。

「俺はミナキに寝返ったんじゃないやねえ、元に戻ったんだ。おめえも俺と同じ魔王に洗脳され、魔界の四天王になった」

「何のことかしら」

「わからないだろうな。俺もそうだったから。おめえを倒して元に戻す」

「私を倒す？ 倒せるかしら」

「俺の魔法は土の属性だ。おめえは土の属性に弱い水の属性だから余裕で倒せるだろ」

ピーターはヘツと笑った。

「くっ」

「スウィーヌはピーターの魔法に弱い！ ピーターと一緒に倒すことができる」

「ミナキの言うとおりだ」

「私の魔法は水の属性に弱い火の属性だから、スウィーヌには効かない。ピーターがいて良かったわ」

「そう言ってくれと、嬉しいぜ。ルビー」

ピーターはヘツと笑った。

「私は魔王によって、強化されている。余裕で倒せるかどうか、試してみると良いわ」

スウィーヌは両腕を広げた。水がスウィーヌを包み込んだ。

「スウィーヌ、おめえを倒せば元に戻るなら、このアマウスが倒してやる」

アマウスはスウィーヌに向かって走り出し拳を放ったが、スウィーヌの体をすり抜けてしまっ

た。
「ふふ」

「こいつ実体がないのか」

アマウスの言うとおりに、精霊であるスイーヌには実体がないのでアマウスの攻撃はその体をすり抜けてしまう。

「くらえ、ウォーターハードミサイル」

スイーヌを包み込んだ水が無数の水の針となって、アマウスをめがけて飛んで来た。

「うわああっ」

アマウスはよけられずまともにくらって倒れた。

「ううっ」

「アマウスさま」

ミナキ、スター、ピーター、ルビーは倒れたアマウスに駆け寄った。

「くらえ、ウォーターハードミサイル」

スイーヌを包み込んだ水が無数の水の針となって、ミナキ、スター、ピーター、ルビーをめがけて飛んで来た。

「きやああっ」

「うわああっ」

ミナキ、スター、ピーター、ルビーはよけられずまともにくらって倒れた。

「やさしい水も、私の手にかかれば、鋭い針のようにあなたたちを切り裂くわ……」

スウィーヌは笑みを浮かべた。

「み、水をこ、ここまで操るなんて、さ、さすが水の精霊ね」

「っ、強いわ」

「くっ」

「ま、魔王によって、き、強化されているだけのことはある」

「ま、魔王はそのパワーを利用してはいるってことね」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーは立ち上がった。

「スウィーヌは実体がないので、ダメージを与えるのは難しく、魔法攻撃を中心にするしかないわね」

「私は攻撃魔法が使えないから、攻撃魔法が使えるミナキ、ピーター、ルビーをサポートするわ」

「スターと同じく」

「俺は攻撃魔法でスウィーヌを攻める」

「私は攻撃魔法でスウィーヌを攻めると不利だから、超能力でスウィーヌを攻めるわ」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはどうやってスウィーヌを攻撃するかを話し合った。

「みんな、スウィーヌを攻める前に回復してあげるわ。ヒール」

スターはヒールを全体に使った。ミナキ、リス、スター、アマウス、ピーター、ルビーの戦い

でついた傷が回復した。

「ありがとう、スター」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはスウィーヌを包囲した。

「スウィーヌ、あなたを包み込む水をウォーターで打ち消すわ」

ミナキはウォーターでスウィーヌを攻撃したが、スウィーヌを包み込む水によってかき消された。

「ウォーターがかき消された」

「その程度の水の魔法では、私を包み込む水を打ち消すことはできない。私の水の魔法を見せてあげるわ、アイスショット」

スウィーヌはアイスショットでミナキを攻撃した。

「ああっ」

ミナキはよけられずまともにくらって地面に片膝をついた。

「ミナキ」

「くっ、っ、強いわ」

「俺に任せろ！」

ピーターはアイスショットでスウィーヌを攻撃した。スウィーヌを包み込む水を貫きスウィーヌにヒットした。

「くっ」

スウィーヌは仰け反った。土の属性に弱い水の属性なので、本当なら大きなダメージを受けていたが、魔王によって、強化されているため、ピーターの魔法によるダメージは軽減された。

「ちっ、余裕で倒せるわけがねえってことか」

「そういうこと。ラット、おまえが私と同じ魔界の四天王だったら、魔王によって、強化されていたことで私と同等の強さだったはず。ミナキに寝返ったから、私より弱くなったのよ」

「何だと」

「ラット、ミナキに寝返ったことを後悔するといい。ミナキと一緒に、まとめて葬ってやるわ。ふたりまとめてね」

スウィーヌがウオーターハードミサイルでミナキとピーターを攻撃しようとすると、立ち上がったミナキとピーターはスウィーヌの後方にマウン山に今までなかった樹木があるのを見つけた。

「ピーター、樹木があるわ。森魔法が使える」

「そうだな。よし」

「スウィーヌ、ピーターを甘く見ないほうがいいわよ」

「ミナキの言うとおりでせ。スウィーヌ」

ピーターはへつと笑った。

「何」

「森魔法を見せてやる」

ピーターは森魔法で樹木を操って、スウィーヌを攻撃した。スウィーヌを包み込む水を貫きスウィーヌにヒットした。

「くっ」

スウィーヌは仰け反った。

「俺の森魔法は木の属性だ。土の属性と同じように水の属性に強い」

ピーターの言うとおり、木の属性に弱い水の属性なので、本当なら大きなダメージを受けていたが、魔王によって、強化されているため、ピーターの森魔法によるダメージは軽減された。

「なるほど。ラットは水の属性に強い土の属性の魔法と木の属性の森魔法を使うのね」

「そういうことよ、スウィーヌ」

「スウィーヌ、魔王によって、強化されているため、俺の魔法によるダメージは軽減されても、ダメージは与えているはずだ」

「ラットの言うとおりのよ。うっ！」

ピーターの土の属性の魔法と木の属性の森魔法は水の属性に強いので、スウィーヌに与えるダメージは通常の二倍となるが、スウィーヌは魔王によって、強化されているので、通常の二倍の魔法防御力によって、通常となるので、ピーターの魔法攻撃がスウィーヌにとって結構効いているからだ。

ラットと戦った時、ラットの魔法による大きなダメージを受けたミナキにとって、水の属性に強い土の属性のラットは強敵だった。スウィーヌにとっても、水の属性に強い土の属性と木の属性のピーターは強敵のはずだとミナキは確信した。

「ミナキの言うとおり、ラットは私にとって、強敵なので、甘く見ないほうがいいわね」
スウィーヌとミナキ、ピーターが互いに向き合っている。

スターが回復魔法でミナキを回復してあげようとする、アマウスは、
「ミナキ、きずくすりだ」

と言って、懐の中に持っていた袋の中からきずくすりを取り出しそれをミナキの体にできた傷に塗布すると、傷はみるみるうちに治っていった。

「ありがとうございます。アマウスさま」
ミナキは立ち上がると、アマウスに礼を言った。

「スターが回復魔法を使うと、魔法力を消費してしまう。魔法力が尽きてしまうと、回復することができなくなる。スターの魔法力を温存するためにも、回復アイテムを使えばいいだろう」

「ありがとうございます、アマウスさま」
スターはアマウスの配慮に感謝した。

「あなたたちが回復するなら、私も回復するわ。ウォーターヒール」
スウィーヌはウォーターヒールを使った。ピーターから受けたダメージを回復、すぐに全快し

た。

「回復、すぐに全快したわ」

「くっ、やはり魔王に強化されているだけあるか」

「ピーター」

「ミナキ、魔王によって、強化されている間、魔法力は強化されているだけではなく、無限だ。俺もそうだったからな」

「ええっ！ 魔法力が無限ということは、魔法を使い放題ってこと？」

「そうだ」

「そんな」

「だから、俺たちの魔法力が尽きる前に、スウィーヌが回復する前に、大きなダメージを与えなければならぬ」

「なるほど、スウィーヌは物理攻撃が効かないから、魔法で攻撃しなければならぬ。私たちの魔法力は限られているから、私たちの魔法力が尽きる前に、魔法を上手に使って、スウィーヌを倒さないといけないということね」

ミナキは納得した。

「あ、そうだ、おめえは幻獣界の幻獣を呼び出す魔法が使えるよな」

ピーターは思い出したようにそう言った。

「ええ。召喚魔法ね」

「ああ。幻獣を呼び出せよ。俺と戦った時のように、幻獣と一緒になら、魔王によって、強化されているスウィーヌと対等に戦えるだろ」

ミナキは召喚魔法を使って、幻獣を呼び出そうとした。

「……」

「どうした？ ミナキ」

「私の今の魔法力では、スウィーヌに対して、有利な属性を持つ幻獣は残念ながら、呼び出せないわ」

ミナキの召喚魔法は、異世界の者を呼び出すため、攻撃魔法や回復魔法よりも多量の魔法力を必要とする。強力な幻獣を呼び出せば、呼び出すほど、多量の魔法力を必要とする。今のミナキの魔法力は不足しているため、召喚魔法を使って、ピーターと戦った時の幻獣より強力な幻獣を呼び出すことはできなかった。

「そ、そうか。あ、そうだ。キマイラはどうだ？」

「キマイラは火の属性だから、スウィーヌに対して、不利な属性を持つからダメよ」

「そ、そうか」

「カーバンクルでスウィーヌの魔法を跳ね返すことで、みんなが大きなダメージを受けないようにすることはできるわ」

「ダメだ、ミナキ」

「え？ どうして」

「カーバンクルでスウィーヌの魔法を跳ね返すと、スウィーヌを回復させてしまうからだ」

スウィーヌは精霊であるため、自分に対して、有利な属性を持つ魔法を放った相手に跳ね返されると、回復するアビリティを持つ。

「そうなのね」

「精霊のアビリティだ」

「じゃあ、召喚魔法は使えないわね」

「仕方ない、俺の魔法で攻撃するしかない」

「ピーター、頼りにしているわ」

（魔王によって、強化されているスウィーヌの魔法力に対抗するには、妖魔の短剣を手にして、魔法の能力を大幅に上げるしかない）

ピーターはそう思うと、懐にある妖魔の短剣を手にしようとして、懐に手を入れたが、取り出すことはできなかった。なぜなら妖魔の短剣は魔王に洗脳されてから授かったものであり、魔王の四天王として、ミナキを倒すために使ったが、オリビアがミナキをかばい、死んでしまったため、アマウスにとって、妖魔の短剣は姉であるオリビアの敵となった。だからピーターは魔王に洗脳されたとはいえ、敵対してしまったミナキとアマウスの前では、魔王を倒すまでは、妖魔の

短剣は絶対に手にしないと心に決めたからであった。

「ピーター、妖魔の短剣を手にしようとしたのね」

ミナキが懐に手を入れた。ピーターを見て言った。

「い、いや」

ピーターはそう言うと、懐から手を出した。

「ピーター、妖魔の短剣を手にするのだ」

アマウスが妖魔の短剣を手にするのをやめた。ピーターを見て言った。

「アマウスさま」

「スウィーヌに大きなダメージを与えられるのは、おまえの魔法ということがわかった。おまえが妖魔の短剣を手にすることで、スウィーヌが倒せるなら……」

「ピーター、妖魔の短剣を手にするのよ。あなたが頼りだから」

「スター」

「ピーター、スターとアマウスさまの言うとおりよ、妖魔の短剣を手にして」

「ミナキ」

「さつきから何を言っているのかわからないけど、そろそろおまえたちには魔界のために死んでもらうわ」

「スウィーヌ」

スウィーヌはダイヤモンドダストでミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを攻撃した。
ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーはよけられずまともにくらって倒れた。

「うう」

「くっ」

ミナキ、スター、ピーター、アマウスが立ち上がりしている中、ルビーだけが立ち上げられない。なぜならルビーは火の属性であるため、水の属性に弱いので、魔王によって、強化されているスウィーヌの魔法は大きなダメージを受けるからだ。

ミナキ、スター、ピーター、アマウスは立ち上がると、よろけながら、倒れているルビーに駆け寄った。

「ル、ルビー、し、しっかり」

「……」

「ス、スター、ア、アマウスさまとルビーを回復させてあげて。わ、私はピーターとスウィーヌを攻撃するわ」

「わ、わかったわ、ミナキ」

「ミ、ミナキ、ピ、ピーター、きずくすりだ」

アマウスは懐の中に持っていた袋の中からきずくすりを取り出しそれをミナキとピーターの体にできた傷に塗布すると、傷はみるみるうちに治っていった。

「ありがとうございます、アマウスさま」

スターはヒールを、アマウスはきずくすりを使って、自分を回復させてから、ルビーを回復させるが、大きなダメージを受けたので、すぐには回復しない。ルビーは立ち上がれず、倒れたままだ。

「回復しても無駄よ。私は魔法力が無限だから、魔法は何回でも使えるけど、おまえたちは魔法力が有限だから、魔法は何回も使えない。魔法力が尽きると、回復、私を攻撃できなくなる。おまえたちに勝ち目はないわ」

「くっ」

ミナキはこのままスウィーヌの魔法攻撃を受けて、回復の繰り返しだと、回復魔法を使うスターの魔法力が尽きて、アマウスのきずくすりがなくなって、回復できなくなり、みんながスウィーヌにやられてしまうという危機感を抱いた。

「あら、一人立ち上がれず、倒れたままね」

スウィーヌは立ち上がれず、倒れたままのルビーを見て言った。

「スウィーヌ」

「ミナキ、おまえだけではなく、おまえの仲間も葬ってやるわ」

スウィーヌはそう言うと、アイスショットで立ち上がれず、倒れたままのルビーを攻撃し、とどめをさそうとした。

「そうはさせないわ」

ミナキはピーターと立ち上がれず、倒れたままのルビーを回復させるスターとアマウスを護るように取り囲んだ。

「ミナキ、ピーター」

「みんなまとめて葬ってやるわ」

スウィーヌはダイヤモンドダストでミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを攻撃したが、ピーターが森魔法で操っていた樹木がミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを覆い、ダイヤモンドダストを防いだ。

「へッ、俺の森魔法を甘く見るなよ、スウィーヌ」

「くっ、私の魔法を防ぐとは」

「そうか、ピーターの森魔法が解けていなかったから樹木が私たちを」

「そういうことだ、ミナキ」

「ピーター」

「言っただけだ、スウィーヌ。俺の森魔法は木の属性だ。土の属性と同じように水の属性に強い。だから、おめえの魔法を防ぐことができるのだ」

「そういうことね」

ミナキの肩に乗っているリスはスウィーヌとの戦いが長引くと、みんなの体力と魔法力の消耗

が激しくなり、魔法力が尽きて、回復、スウィーヌを攻撃できなくなってしまった。早急にスウィーヌを倒そうと言わんばかりにキツキツとミナキを見て鳴いた。

「そうね、リス」

ミナキはリスの頭を撫でて言った。

「ミナキ、俺の魔法でスウィーヌを倒す」

「お願いね、ピーター」

リスがミナキの肩からピーターの肩に飛び移り、お願いと言わんばかりにキツキツとピーターを見て鳴いたが、

「ミナキ、リスは何を言っているのだ？」

ピーターはリスが何を言っているのかわからなかったので、ミナキに訊ねた。

「お願いって言ってるのよ、ピーター」

ミナキは答えた。

「そうか。わかったよ、リス」

ピーターはリスの頭を撫でて言った。

「さあ、これでフィニッシュよ。ウォーターハードミサイル」

スウィーヌを包み込んだ水が無数の水の針となって、ミナキ、スター、ピーター、ルビーをめがけて飛んで来た。

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを覆っている樹木がウォーターハードミサイルを防いだ。

「無駄よ。ウォーターハードミサイルは攻撃対象を鋭い針のように切り裂くわ」

「うっ」

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを覆っている樹木がウォーターハードミサイルによって切り裂かれた。

「死ねえー！」

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーがウォーターハードミサイルをよけられずともにくらう瞬間、回復したルビーが立ち上がり、テレキネシスでスウィーヌの動きを封じた。

「ルビー」

「私の火の属性の攻撃魔法は、火の属性に強い水の属性のスウィーヌに無効だけど、超能力は、無属性で属性の強弱はないから、スウィーヌには有効ね」

「くっ」

スウィーヌはルビーのテレキネシスで動きを封じられて、身動きできない。

スウィーヌが動けなくなったため、ウォーターハードミサイルはミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを攻撃する前に消えた。

「ウォーターハードミサイルが」

「ピーター、今よ！」

ミナキがピーターにスウィーヌを攻撃する合図を送ると、リスはピーターの肩からミナキの肩に飛び移った。

「よし！」

ピーターは懐にある妖魔の短剣を敵対してしまったミナキとアマウスの前では、魔王を倒すまでは、絶対に手にしないように配慮するため、懐から出さずに手にし、魔法の能力を大幅に上げて、アースショットでスウィーヌを攻撃した。

「ああああああっ」

スウィーヌはピーターの魔法攻撃をまともに受けてしまい、大きなダメージを受けて倒れた。

「やった！ ピーター」

「ああ」

スウィーヌを倒してミナキとピーターが喜んでいるのを見て、ミナキの肩に乗っているリスが尻尾を振った。物事がうまくいって、嬉しそうだ。スター、アマウス、ルビーも喜んでいる。

ピーターは懐にある妖魔の短剣を見て、手にして良かったと思った。もし、妖魔の短剣を手に入らず、魔法の能力を大幅に上げなければ、魔王によって、強化されているスウィーヌに大きなダメージを与えて倒すことはできなかっただろう。

「ミナキ、ピーター」

スター、アマウス、ルビーがミナキとピーターに駆け寄った。

「スター、アマウスさま、ルビー」

ピーターとルビーは「よくやった」と互いに言い合った。

「スウィーヌ」

ミナキはスター、ピーター、アマウス、ルビーと倒れたスウィーヌに駆け寄った。

「だ、大丈夫よ」

スウィーヌはそう言うのと、ウォーターヒールを使って、自分を回復させてから立ち上がった。

魔王の洗脳が解けて、精霊に戻ったスウィーヌの体色が青色から水色に変わり始めた。

「スウィーヌの体色が変化していく」

「おまえたちが私を倒したことにより元に戻ったからよ」

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーは魔王に洗脳され、魔界の四天王になったスウィーヌを倒して、精霊に戻すことができ良かったと思った。

「さあ、帰るわよ」

スウィーヌはミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを連れて禁断の泉に帰って行った。

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーはスウィーヌに連れられて禁断の泉に来た。

「澄んだ水、きれいね」

ミナキは禁断の泉を見て言った。

「人間界にこんな美しい場所があったなんて」

スターが驚いて言った。

「禁断の泉か。ここに来るのは初めてだ」

ピーターは禁断の泉を知っているが、今までに來たことがない。

「スウィーヌはこの精霊なんだね」

アマウスはスウィーヌを見て言った。

「神秘的な泉ね」

ルビーは禁断の泉を見て言った。

禁断の泉は人間界にあるスウィーヌ以外の者は入ることが許されない、スウィーヌに連れてこられなければ、入れない泉である。精霊界の精霊であるスウィーヌが人間界に來て、住むために作り出した。

「ミナキ、私はおまえたちと魔王を倒しに行くことができない。だから、私の魔法をおまえに与えるわ」

「スウィーヌ、あなたの魔法を私に」

スウィーヌは両腕を広げた。水がミナキを包み込んだ。



こうしてミナキはスウィーヌからスウィーヌの水の魔法を手に入れた。

「ミナキ、今のおまえの魔法力では私の魔法を使うことはできないわ。魔法力を鍛えるように」「わかっているわ。あなたの水の魔法を使えるように、魔法力を鍛えるわよ」

スウィーヌの体色が青色から水色に変わり終えた。水色は本来の体色である。体色が水色から青色に変化した理由は、魔王に洗脳され、魔界の四天王になったからだ。

「スウィーヌ、魔王を倒しに行くわ」

「じゃあな、スウィーヌ」

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーが出発の挨拶をして、禁断の泉を出ようとする
と、スウィーヌに「待つて」と呼び止められた。

「何、スウィーヌ」

「戦いの後で疲れているでしょう。休んで行くといいわ」

スウィーヌがそう言つて、ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーを気遣つた。

「ありがとう、スウィーヌ」

「疲れた時は、いつでもここに来るといいわ」

スウィーヌはそう言い残して、水の中に消えた。

ミナキ、スター、ピーター、アマウス、ルビーは禁断の泉で休んだ後、魔王を倒すため、禁断の泉を出た。

第五章

禁断の泉を出たミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーがラエティアからナチュラルストーンを授かる者を探すため、禁断の泉から南に向かって歩いてみると、モトリが見えてきた。「モトリに入ったら、私、スター、アマウス、ルビーのナチュラルストーンは共鳴して強く光かもしれないわね」

ミナキ、スター、アマウス、ピーター、ルビーはモトリに入った。だが、ミナキ、スター、アマウス、ルビーのナチュラルストーンは共鳴して強く光らない。

「ああ。この近くにラエティアからナチュラルストーンを授かる者はいないのね。ラエティアからナチュラルストーンを授かる者が見つからないと、魔王を倒せないわ」

ミナキがそう言うと、ピーターは、

「ミナキ、俺、ここでみんなと別れるよ」

とミナキを見て言った。

「えっ、どうして」

「ラエティアさまからナチュラルストーンを授かる者ではない自分がいても役に立たない」

「そんなことないわ、ピーター」

「いや、ピーターの言うとおりよ」

スターがはっきりと言うと、ミナキは、

「スター、なんてことを言うの！」

とスターに怒って言った。

「いいよ、ミナキ、スターの言うとおりだから」

ピーターはミナキを宥めて言った。

「ピーター」

「ミナキ、俺、情報収集するよ。世界の森を巡る旅をしていたからね」

「そうか。ピーターは世界のこと、私たちより詳しいから、有力な情報を収集できるといふこと
ね」

「そういうことだ」

ピーターは肯いて言った。

「ピーターと別行動したら、私、心配だわ」

ピーターがミナキに、

「何が心配だ？」

と訊ねると、ミナキは、

「ピーターがまた魔王に洗脳されて、魔界の四天王にならないか」

と答えた。

「心配しなくてもいい。俺は大丈夫だから」

ピーターはミナキを安心させるように言った。

「ピーターの言うとおりよ、ミナキ。ピーターが魔王に洗脳されて、魔界の四天王になり、ミナキと戦って、良心を取り戻したことは、テレパシーでわかったわ」

「ルビー」

「すげえな、ルビー、おめえに俺とミナキの事情を説明しなくても、テレパシーでわかるのか」

ピーターは驚いて言った。

「ええ。テレパシーは人の心を読むからね。話さなくてもわかるわよ」

(ルビーのいうことは、本当かしら)

「ミナキ、私のいうことが嘘だと思えば、予知能力で本当だということをわからせてあげるわ」
ルビーは予知能力で、ピーターがまた魔王に洗脳されて、魔界の四天王にならないかどうかを予知した。

「ピーターのミナキのことを思う強い気持ちだが、もう魔王に洗脳されないようにしているわ。ピーターは大丈夫よ」

「そう、そうなのね。ああ」

ミナキは安心した。

「じゃあ、みんな、俺はここでさよならだ」

「ピーター」

「ミナキ、また会おう」

ピーターはミナキと再会の約束をして、ミナキ、スター、アマウス、ルビーと別れた。

「ピーター、また会おうね」

ミナキはピーターの去って行く後ろ姿に向かって言った。

ミナキ、スター、アマウス、ルビーと別れた。ピーターがモトリをしばらく歩いていると、黒い影が走り去った。

（魔界の者だな）

ピーターはそう思うと、黒い影を追った。

「なんというスピードだ。追いつけねえ」

黒い影はピーターより素早く、ピーターが追いつくものではなかった。

「追いつけねえなら、捕まえてやるぜ」

ピーターは森魔法で樹木を操り、黒い影を捕まえようとしたが、黒い影は素早く樹木をかわしてピーターの視界から消えた。

「くっ、捕まえられなかったか」

ピーターは黒い影を捕まえるのに失敗した。

「ここで立ち止まっているわけにはいかないな」

ピーターは有力な情報を収集するため、先を急いだ。

ミナキ、スター、アマウス、ルビーがモトリを抜けると、黒い影が走り去った。

ミナキの肩に乗っているリスが走り去った黒い影に向かって「キツキツ」と鳴くと、ミナキは、
「リスが怒っているわ」

とリスを見て言った。

「後を追うわよ、ミナキ」

「ええ、スター」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーが黒い影を追うと、マウ山が見えてきた。

「黒い影がマウ山に入ったわ」

リスがさつきからずっと黒い影に向かって怒っている。

(魔界の者かもしれないわね)

ミナキがそう思っていると、スターは、

「ミナキ、リスが黒い影に向かって怒っているということは、魔界の者かもしれないわ。マウ山に入るわよ」

「ええ、スター。私も同じことを思っていたからね」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーがマウ山に入り登って行くと、シノビ城の忍者兵が負傷して横たわっていた。

「う、うう」

「怪我は大丈夫かしら」

ミナキが心配しながら言うと、スターは、

「致命傷ではないから大丈夫よ。回復魔法で治せるわ」

と言って、忍者兵の傷をヒールで治した。

「すまない。助かった」

忍者兵は立ち上がると、スターに礼を言った。

「黒い影が桜さまと我々に不意打ちをして、去ってしまった」

ミナキが桜と一緒にではないことに気づき、忍者兵に、

「桜は？」

と訊ねると、忍者兵は、

「黒い影を追い、山頂に向かわれた」

と答えた。

「私たちと山頂に向かいましょう」

桜に会って、伝えたいことがあるため忍者兵に同行しようとミナキはそう言った。

忍者兵が初対面であるミナキ、スター、アマウス、ルビーに、

「そなたたち、我々シノビ城の忍者のことを知っているのか」

と訊ねると、ミナキは、

「ええ」

と答えた。

「そうであつたか。では、参ろう」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーは忍者兵と山頂に向かった。

ミナキ、スター、アマウス、ルビーが忍者兵と頂上に登ると、桜が黒い影と戦っていた。

「桜さま」

忍者兵が桜を呼ぶと、ミナキは黒い影と戦っている女忍者が桜なのだ認識した。

「いかん。桜さまが押されている。お助けせねば」

忍者兵が苦戦している桜に向かって走って行くと、ミナキは、

「みんな、私たちも桜を助けに行きましょう」

と言って、スター、アマウス、ルビーと忍者兵の後を走って行った。

「くっ」

桜は黒い影の攻撃を受けて、片膝をついた。

「闇討ちで殺せなかったが、これでやっとな殺せる。死ぬが良い」

黒い影が桜に鎖鎌を振り下ろそうとすると、忍者兵は黒い影に向かって手裏剣を投げた。

「むっ、おまえたち」

黒い影は鎖鎌で手裏剣を弾きながら、桜を守るように立ちはだかる忍者兵を見て言った。

「そ、そなたたち、怪我は大丈夫だったのか」

桜は驚きながら言った。桜を黒い影の闇討ちから身を挺してかばい重傷を負った忍者兵が無傷で自分の元に戻って来たからである。

「この者たちが我々の傷を治してくれたのです」

忍者兵がそう言うと、ミナキ、スター、アマウス、ルビーは桜の名前を呼びながら桜に駆け寄った。

「まずは回復させるわね」

スターは桜の傷をヒールで治した。

「すまない。助かった」

桜は立ち上がると、スターに礼を言った。

「そなたたちは」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーは桜に名前を聞かれて名乗った。

「ミナキにスターにアマウスにルビーか。私は」

桜が名乗ろうとすると、ミナキは、

「桜ね。流離の旅をしているのでしよう。私たち、あなたたちシノビ城の忍者のことは知っているの」

と言った。

「そうであつたか。そなたたちは旅の者か」

ミナキは「ええ」と頷いてから、桜にシノビ城が滅亡したこと、息絶えた忍者兵が「シノビ城が滅亡しても生きてください」と言い残したことを伝えた。

「シノビ城が滅亡したなんて」

桜は信じられないと言わんばかりに首を振った。

忍者兵がミナキに、

「シノビ城を滅ぼした者とは？」

と訊ねると、ミナキは、

「魔界の者よ」

と答えた。

「その通り。余がシノビ城を滅ぼした」

黒い影はそう言うと、実体を見せて、ベレルと名乗った。

「ベレル、魔界の者ね」

ベレルは魔界の忍者である。人間界の忍者を殺すために魔界の四天王、スウィーヌに命じてシノビ城を滅亡させた。桜と忍者兵を闇忍術である闇討ちで殺そうとしたのも人間界の忍者を殺すためであった。

ミナキはスター、アマウス、ルビーとベレルからスウィーヌがベレルの命によりシノビ城を滅ぼしたことを聞くと、

「ベレル、シノビ城を滅ぼすためにスウィーヌを操っていたなんて、許せない」と憤った。

桜は忍者兵と刀を構えると、

「ベレル、そなたを倒す」

とベレルによって滅ぼされたシノビ城、息絶えた忍者兵の仇討ちのため、ベレル打倒を決意した。

「余を倒すなど笑止！ おまえたちを殺す」

ベレルは鎖鎌を構えた。

ミナキ、スター、アマウス、ルビーは桜、忍者兵と共にベレルと戦うため、戦闘態勢に入った。リスは左右に尻尾を振って威嚇している。

桜がミナキ、スター、アマウス、ルビーに、

「そなたたち、我々と共にベレルと戦うつもりか」

と問いたですと、ミナキは「ええ」と頷いてから、

「ベレルとの戦いはあなたの戦いではないわ。私たちの戦いでもあるの。私たち、魔王を倒すために魔界の者と戦っているのだから」

と答えた。

「そうであったか。では、我々と共にベレルと戦おう」

「余の狙いは人間界の忍者。おまえたちはおとなしくしていてもらおう」

ベレルは闇忍術である影縛りを使って、ミナキ、スター、アマウス、ルビーの動きを封じた。

「う、動けないわ」

「こ、これでは桜と共にベレルと戦えない」

アマウスがルビーを見て、

「ルビー、超能力で何とか動けるようにならないのかい」

と言うと、ルビーは超能力で何とか動けるようにしたが、無理だった。

「アマウスさま、ダメですわ」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーは桜、忍者兵と共にベレルと戦えなくなり、桜、忍者兵とベレルの忍者の戦いが始まった。



「動きを封じられなければ、桜と共にベレルと戦えたのに」

ミナキが悔しそうに言う、桜は「悔しがることはない」と言わんばかりに、

「このベレルとの戦いは私の戦い、忍者の戦いとなった。だからそなたたちは私と共にベレルと戦わなくていい」

と言った。

「忍者の戦い」

「ベレルを倒せば、そなたたちは動けるようになる」

「そなたたち、ベレルを倒せるよう、桜さま、我々を見守ってください」

忍者兵がそう言うと、ミナキは、

「ええ、見守るわ」

と言って、スター、アマウス、ルビーと桜、忍者兵を見守った。

「ベレル、そなたは我々が倒す！ 参る！」

桜は忍者兵とベレルに向かって走り出し、刀を振り下ろした。

「おまえたちに余は倒せぬ」

ベレルは鎖鎌を構えると、鎌と鎖をピンと張って、桜と忍者兵の刀を受け止めた。

「動けなくしてやろう」

ベレルは分銅で桜と忍者兵を打ち据えようと、桜と忍者兵に分銅を振り下ろしたが、桜と忍者

兵は素早くかわした。

「かわしたか。動けなくしてから殺そうとしたが……。では、苦しめてから殺そうか」

ベレルは闇忍術である毒霧を使い、桜と忍者兵を毒に冒した。

桜と忍者兵の顔色が悪くなっていく。

「くっ」

「うっ」

「ああっ、桜たちが……。スター」

ミナキが毒による苦痛に苦しむ桜と忍者兵を見て言うと、スターは、

「ダメよ、ミナキ。動けないから、キュアで解毒できないわ」

と言った。

「おまえたち、魔王を倒すために魔界の魔族と戦っているようだな。こいつらを殺したら、次は

おまえたちを殺すでしょう」

ベレルはミナキ、スター、アマウス、ルビーを見て言った。

「くっ、ベレル」

ミナキはベレルを睨みつけた。

スターが何とかならないのかと思っていると、ミナキは肩に乗っていたリスがいらないのに気づいた。

(リス、どこなの)

「苦しいか、おまえたち。すぐに殺してやる」

ベレルは鎌を振り上げた。

桜と忍者兵は片膝をつき、苦痛に顔を歪め、ベレルを睨んだ。

「ふふっ。良い顔だ。死ぬが良い！」

ベレルは桜と忍者兵に鎌を振り下ろした。

「桜たちがやられる！」

ミナキが目を閉じた時、

「うっ、うがあっ！」

ベレルの叫び声がした。

「やられたのはベレルだわ」

ミナキが目を開けると、桜に胸を斬られ、忍者兵に蹴り飛ばされて、吹っ飛んで倒れたベレル、顔色が良くなり、立ち上がっている桜と忍者兵が見えた。

「桜たち、良かったわ」

ミナキは安心したと同時に桜と忍者兵の毒を治したのはリスではないかと思つた。

「苦しくない。我々の毒が消えたのか」

「桜さま、そのようですね」

桜と忍者兵は立ち上がり、倒れたベレルを見て、毒が消えなければ、ベレルに殺されていただろうと思った。

桜がどうして毒が治ったのかと疑問に思っていると、懐からリスが顔を出した。

「そ、そなたはミナキの肩に乗っていた栗鼠か」

「キツ」

リスはそうだと囁きながら鳴いた。

桜は消えていくリスの角が放った光を見て、毒を治してくれたのはリスだということがわかった。

「そなたが我々の毒を消してくれたのか。助かった」

桜はリスの頭を撫でながら言った。

「リス！ どうして桜たちのところへ？」

リスが桜の懐から顔を出しているのを見たミナキが疑問に思ったことを言うと、スターは、

「リスはベレルに動きを封じられなかったからよ。ベレルのターゲットではなかったのだから」

と言った。

「そうか。だからリスがスターの代わりに桜たちの毒を治してくれたのね」

「ミナキ、桜たちがベレルを倒すまで、リスが桜たちをサポートしていることがベレルにわかってしまうと、リスがベレルのターゲットになるわ。私たちが動けない今、そうならないように願

わないとね」

スターがそう言うと、ミナキは頷き、そうならないように願った。

桜がリスに毒を治してくれたことがベレルにわからないようにと思い、

「そなたは懐に入って隠れているのだ」

と言うと、リスは懐に入った。それを見たミナキは良かったと安心して、リスに桜たちをお願
いねと呟いた。

「お、おのれ、余の体に傷を」

ベレルは桜に斬られた胸をおさえながら、立ち上がった。

「ベレル、そなたを倒す」

桜はそう言うと、忍者兵と刀を構えた。

「おまえたち、どうやって毒を治して、余を攻撃できたのかは知らんが、この程度の攻撃では余
は倒せぬ。余を倒すことを諦めさせてやろう」

ベレルは鎖鎌を構えた。

桜がベレルの胸の傷を見ると、いつの間にか完全に治っていた。驚きを隠せずにいると、ベレ
ルはふふっと笑い、

「驚いたか。魔界の魔族は再生できる。この程度の攻撃では余は倒せぬと言ったのはこのためだ」

「再生できないように、重傷を負わせないと、倒せないということか」

「そういうことだが、おまえたち人間界の人間力では無理だ」

ベレルは首を横に振りながら言った。

「それでも、私たちはそなたを倒さなければならぬ」

「余に滅ぼされたシノビ城の仇討ちのためか」

「それだけではない。ミナキたちのためにも」

桜はミナキ、スター、アマウス、ルビーを見て言った。

「なるほど。だが、おまえたちが余を倒すことはない。なぜならおまえたちは余に殺されるからだ」

ベレルは桜と忍者兵に向かって走り出し、鎌を振り下ろした。桜と忍者兵は頭上で刀を横にして、ベレルの鎌を受け止めたが、衝撃に耐えきれず、片膝をついた。

「つ、強い。こ、これが魔界の魔族の力か」

「そうだ」

ベレルはそう言うと、桜と忍者兵を蹴り飛ばした。

「くっ！」

吹き飛んだ桜と忍者兵は受け身も取れずに倒れた。

「ベレル、強敵だわ」

ミナキが怯むと、スターは、

「ミナキ、怯まないで。私たちはこれから魔界の魔族と戦うのよ。どのようにして戦うか考えるためにも、ここでベレルをよく見ておくのよ」

と言った。

ミナキは黙って頷いた。

「なあ、ルビー。桜たちの未来を予知できるか？」

アマウスがルビーに訊ねると、ルビーは予知能力で、桜と忍者兵の未来を予知し、「桜たちはベレルを倒して、シノビ城を再建する」

と答えた。

「ということは、桜たちは大丈夫だな」

「いいえ」

ルビーは首を横に振りながら言った。

「えっ？」

「予知は的中するとは限らない。ベレルが予知を覆すことがあれば、桜たちは……」

「私は、私は！ 桜たちはベレルを倒して、シノビ城を再建すると信じる」

「アマウスさま」

桜と忍者兵は立ち上がると、忍術である分身の術を使い、時間差攻撃でベレルを攪乱させようとしたが、ベレルの攻撃により分身を次々と消し去られ、最後は本体を蹴り飛ばされて倒れた。

「くっ」

「分身の術が破られるとは」

桜と忍者兵が立ち上がり、刀を構えると、ベレルはふふっと笑い、

「おまえたちの分身とは違う、余の分身を見せてやろう」

ベレルは闇忍術である影分身を使った。

桜と忍者兵はベレルの分身を攻撃した。

「何!」

「攻撃しても消えない」

「おまえたちの分身は実体がないため、攻撃すると消えるが、余の分身は実体があるため、攻撃しても消えない」

「実体がある分身」

「ということは、分身を消し去るには、分身を生み出している本体を倒さないといけないということか」

「その通り。だが、おまえたちに余の本体は倒せない。余の分身に殺されるからだ」

ベレルの本体と分身は桜と忍者兵に向かって走り出し、鎌を振り下ろした。桜と忍者兵は刀で受け止めた。切り裂かれなかったが、勢いで吹っ飛ばされた。

ミナキが倒れた桜と忍者兵を見て、スターに、

「桜と忍者兵、どうなるのかしら？」

と訊くと、スターは、

「本体を見つけないければ、ベレルを倒せず、倒されてしまうわね」

と答えた。

「分身は本体と同じように実体を持っているのよ、どうやって本体を見つけろと」

ミナキが声を荒げて言うと、スターはどうやって本体を見つけたら良いのかわからず、黙ったままだった。

「声を荒げてごめんね、スター。わかっていたら、言えたよね」

ミナキは謝った。

「ミナキ、動けない私たちが桜たちにできることは、見守ることだけ」

「そうだね、スター」

桜と忍者兵は立ち上がると、刀を構えた。

「おまえたち、まだ立ち上がるか」

「そなたを倒すまで、我々は何度倒れても立ち上がる」

「なるほど。体力の限界に近づいているようだが」

桜と忍者兵はベレルの言うとおり、立っているのもやっとなほど体力の限界に近づいていた。

「ベレル、そなたを倒す」

桜と忍者兵はベレルの本体と分身に向かって走り出し、刀を振り下ろした。ベレルの本体と分身は鎌で受け止めた。

「ほう、まだこのような力が残っているとは。だが、もう終わりだ」

ベレルの本体と分身は桜と忍者兵に鎌を振り下ろした。桜と忍者兵は忍術である隠れ身の術を使って、かわした。

「隠れ身か」

ベレルの本体と分身は桜と忍者兵に連続して鎌を振り下ろすが、桜と忍者兵は受けると致命傷となるため、隠れ身の術を使って、かわしていく。

「桜たち、ベレルの攻撃をかわしているわ」

「ミナキがよしと言わんばかりの口調で言うと、スターは、

「桜たち、体力の限界が近づいているわ。いつまで攻撃をかわせるか」と言った。

「スター、桜たちはベレルを倒すわ。私は見守っている」

「ミナキ、……そうね。私も」

「ミナキの言うとおりだ。桜たちの未来はルビーが予知した通りになる」

「アマウスさま、どうやらそうなるようね」

ルビーがそう言うと、アマウスは桜たちの未来はルビーが予知した通りになると確信した。

「おまえたちはもう余の攻撃をかわせぬぞ。そこだ！ 死ねえ！」

ベレルの本体と分身が桜と忍者兵の隠れ身の術を見破り、桜と忍者兵に鎌を振り下ろした瞬間、リスが桜の懐から飛び出し、ベレルの顔を引っ掻いた。

「うおおっ！」

リスが攻撃したベレルは本体だった。

「リス！ ベレルの本体を見つけたのね」

ミナキはリスを褒めた。

ベレルの分身はリスに攻撃された本体に視線を向け、桜と忍者兵に鎌を振り下ろした手を止めて、隙を見せた。

リスがベレルの本体の顔を蹴って桜の肩に飛び乗ると、桜は、

「今だ！」

と言って、忍者兵と刀でベレルの本体の胸を貫いた。

「ぐわああああっ！」

ベレルの本体が致命傷を負い、影分身を維持できない状態になったため、分身は消えた。

「く……ま、魔族の余が……に、人間に……や、やられるとは……」

桜と忍者兵が刀を引き抜くと、ベレルは倒れた。

「桜たち」

ベレルが倒れたため、動けるようになったミナキ、スター、アマウス、ルビーは桜と忍者兵に駆け寄った。

刀を鞘に収めた桜と忍者兵は振り向いた。

「そなたたち、動けるようになったか」

「ええ。桜たちがベレルを倒してくれたからね」

ミナキは頷いて言った。

スターは立っているだけでやっとの桜と忍者兵を見て、

「桜たち、回復させるわね」

と言って、桜と忍者兵の傷をヒールで治した。

「すまない、助かった」

桜と忍者兵はスターに礼を言った。

ミナキが倒れたベレルを見て、

「桜たち、ベレルを倒したのね」

と言うと、桜は、

「そなたたちのおかげ。そなたたちの助けがなければ、私たちはベレルを倒すことはできなかった」

と言った。

「リス」

ミナキが桜の肩に乗っているリスに呼びかけた。

「ミナキ、リスは私たちをサポートしてくれた」

桜はリスの頭を撫でながら言った。

「桜、リスが桜たちの役に立って、良かったわ」

「ありがとう、リス。さあ、ミナキの元に」

リスは桜の肩からミナキの肩に飛び移った。

「では、私たちはこれで。シノビ城再建後、そなたたちと再会すれば、共に魔界の魔族と戦おう」

「ありがとう、ミナキたち」

桜と忍者兵はシノビ城再建のため、ミナキ、スター、アマウス、ルビーに一礼し去って行った。

「スター、桜たちと再会すると良いね」

「ええ、ミナキ。魔界の魔族と戦うために、ベレルを倒した桜たちの力は必要だからね」

「ルビー、桜たちの未来、予知した通りになったな」

「はい、アマウスさま。ベレルが予知を覆すことがなかったからですわ」

ミナキ、スター、アマウス、ルビーは去って行った桜と忍者兵について話しながら、マウ山を

抜けた。

桜と忍者兵との忍びの戦いによって、敗戦したベレルは消滅し、魔界の魔族の死を迎えた。

第六章

「ベレル、やられたか」

魔界にベレルの死が伝わり、ベリアルはそう呟いた。

「ベリアルさま、ベレルさまがやられたのは本当ですか？」

ベリアルにそう問いたただしたのは、ベリアルの僕であるミディアンだった。

「ああ」

ベリアルは頷いて言った。

「ま、まさか、人間界の人間に」

ミディアンが恐る恐る聞くと、ベリアルは、

「そうだ」

と頷いて言った。

ミディアンがベリアルに信じられないと言わんばかりの表情を見せ、

「ベレルさまが人間ごときにやられるなんて」

と言うと、ベリアルは、

「人間は幻獣界の幻獣の力を借りて、我々と戦っている。だからであろう」

と言った。

「幻獣は人間を嫌っていたはずなのに、どうして」

「おまえの母親が人間を愛し、人間と幻獣の混血児を産んだからだ」

「何ですって！ だから私は両親に捨てられたのですか」

「そうだ。だから私がおまえを拾い、育てたのだ」

「……」

ミディアンは黙ったまま両親を憎んだ。

「ミディアン、我々と戦う人間に力を貸す幻獣と戦うために必要なのは、おまえの戦力だ。頼むぞ」

ベリアルがミディアンの肩に手を置いて言うと、ミディアンは、

「ははっ」

と言って、頭を下げた。

ミディアンは幻獣界の王と王妃の子であったが、生後まもなくベリアルによって、魔界に連れて来られた。ベリアルが人間界の人間と戦うため、幻獣の力を借りようとしたが、王により断られたため、ミディアンを王妃から強奪したからであった。だが、ミディアンはこの事実を知らず、ベリアルに育てられ、事実でないことを伝えられた。

「ミディアン、ラットとスウィーヌはまだ戻らぬか」

「そのようです、ベリアルさま」

「そうか」

ベリアルはそう言うと、ラットとスウィーヌはミナキによって、倒されたのではないかと推測した。

ミディアンがベリアルにミナキについて聞くと、ベリアルは話した。

「ミナキは人間を愛したおまえの母親が産んだ人間と幻獣の混血児。私と戦う運命の瞳を輝かせる者だ。私が父から授かったブラックストーンとベルゼブルの魔剣と戦うために昔、父の先祖である魔王ベルゼブルと戦った聖女ナワクラティスの子孫であるラエティアからナチュラルストーンと聖剣アドラミティオンを授かり、ここ魔界に向かっている」

「ベリアルさま、ミナキはベリアルさまの敵だけではなく、私の敵でもあります。私と共にミナキと戦いましょう」

ミディアンが誘うと、ベリアルは、

「いや。ミナキと戦うのはこの私だ」

と首を振りながら言った。

「なぜですか？」

ミディアンが声を荒げて言うと、ベリアルは、

「私とミナキは互いに戦う運命の瞳を輝かせる者だからだ。おまえと共にミナキと戦うことはで

きない」

と言ってミディアンの誘いを断った。

「ベリアルさま、サタンさまからベルゼブルの魔剣を授かったのであれば、すぐにでもミナキと戦えるのではないのでしょうか」

ミディアンがそう言うと、ベリアルはサタンから授かったブラックストーンのひとつである『闇』の黒珊瑚とベルゼブルの魔剣を見ろと言わんばかりに見せつけ、

「ブラックストーンには闇の輝きがあるが、ベルゼブルの魔剣には闇の輝きがない」と言った。

「ということは、ベルゼブルの魔剣は封印されているということでしょうか」

ミディアンが闇の輝きがないベルゼブルの魔剣を見て言うと、ベリアルは、
「そのようだな」

と少し間を置いて言った。

「ベルゼブルの魔剣の封印を解くにはどうすれば宜しいのでしょうか」

「わからぬ」

ベリアルは首を振りながら言った。

「ベルゼブルの魔剣の封印を解かなければ、ミナキと戦えないということですか」
「そういうことになるな」

「兄上」

「父上が王の間に集まるように」

ミディアンと話すベリアルに駆け寄ったのは、サタンからの言付けを伝えたベリアルの妹であるルーアとリサだった。

ルーアはサタンの子、ベリアルの妹、リサの姉である。サタンからブラックストーンのひとつである『魔』のブラックオパールを授かった。

リサはサタンの子、ベリアル、ルーアの妹である。サタンにより悪の心と力に目覚め、サタンの手下として鍛え上げられたが、あまりの狂悪なサタンの行動などにより、反発し始めたが、サタンの力で抑えられた。洪々四天王として砦を守らされた。サタンからブラックストーンのひとつである『冥』の黒珊瑚を授かった。

ベリアルが持ち場を離れて、召集されるのが初めてのリサに、

「おまえが持ち場を離れるとは。父上は私たちが王の間に集めて何を話すつもりだ」

と訊ねると、

「わからない」

リサは首を振りながら答えた。

「ルーア、リサ、王の間に向かおう」

ベリアルがルーア、リサと王の間に向かおうとすると、ミディアンは、

「ベリアルさま、私もご一緒します」

と呼び止めた。

「ミディアン、おまえはここにいろ」

ベリアルはそう言うと、ルーア、リサと王の間に向かった。

ベリアル、ルーア、リサが王の間に集まると、王座に座っていたサタンは立ち上がり、

「ベリアル、ルーア、リサ、おまえたちに話すことがある」

と言って、ベリアル、ルーア、リサに近寄った。

「父上、何でしょうか？」

ベリアルが問いかけると、サタンは、

「おまえたちに授けたベルゼブルの魔剣とブラックストーンのことだ」

と答えた。

「何と！ そのことを聞こうとしていました」

ベリアルはサタンに闇の輝きがないベルゼブルの魔剣を見せながら言った。

「ベルゼブルの魔剣の異変に気づいていたか、ベリアル」

サタンがそう言うと、

「はい」

ベリアルは頷きながら言った。

「ベリアルにベルゼブルの魔剣を授けたものの、ブラックストーンを授ける者があとひとりないため、このままでは聖剣アドラミティオンと戦えない」

サタンはベリアル、ルーア、リサにそう言い聞かせた。

(やはりこのままではミナキと戦うことはできないか)

ベリアルは闇の輝きがないベルゼブルの魔剣を見てそう思った。

「父上、ブラックストーンを授ける者があとひとりいないとは、まさか行方不明になっているデビッタでしょうか」

ルーアが問いかけると、サタンは、

「そうだ」

と頷きながら答えた。

デビッタはサタンの子、ベリアル、ルーア、リサの妹である。サタンからブラックストーンのひとつである『冥』の黒珊瑚を授かる者だが、行方不明になったため、サタンからブラックストーンのひとつである『冥』の黒珊瑚を授かれずにいた。

「私がデビッタを探すわ」

「ルーア」

「姉上」

「兄上はここ父上がいる城を、リサは砦を守らなければならない。だからデビッタの搜索は私が

するわ」

ルーアはデビッタの搜索を決意した。

「父上、ルーアがデビッタを見つけたら、父上からブラックストーンを授かる者が揃い、ベルゼブルの魔剣は闇の輝きを放つということですね」

ベリアルが問いかけると、サタンは、

「そうだ」

と頷きながら答えた。

「ルーア、デビッタを見つけてくれ」

「ええ、兄上」

サタンは王座に座ると、

「おまえたち、下がれ、それぞれ役目を果たすのだ」

と言った。

「はい、父上。では、私たちはこれで」

ベリアルはそう言うと、ルーア、リサと王の間を退室した。

「兄上、姉上、私は持ち場に戻ります」

「ああ」

「リサ、四天王として砦を守るのよ」

「……」

リサは黙って、持ち場に戻って行った。

(リサ、父上に反発していたから、洪々四天王として砦を守っているな)

ベリアルはリサの気持ちを見透かしたようにそう思った。

「デビッタは異世界の幻獣界か人間界かどちらかにいる、幻獣界にはいない気がするわ」

ルーアはそう言うと、行方不明のデビッタは人間界にいと推測した。

「ルーア、デビッタは人間界にいるのか」

「ええ、兄上、人間界に向かうわ」

「デビッタを見つけて、戻って来いよ、ルーア」

ルーアはベリアルに見送られて、人間界に向かった。

ベリアルがミディアンのある場所へ向かおうとすると、

「ベリアルさま」

ミディアンが向かって来た。

「ミディアン」

「サタンさまからベルゼブルの魔剣のことをお聞きになられたのですね」

ベリアルは頷くと、

「ベルゼブルの魔剣に闇の輝きがないのは、父上からブラックストーンを授かる者があとひとり

いないからだ。ルーアが行方不明のデビッタを搜索するために人間界に向かった」

とミディアンに話した。

「そうでしたか。行方不明のデビッタさまが見つからないと、サタンさまからブラックストーンを授かる者が揃わず、ベルゼブルの魔剣は闇の輝きを放つことはない。だから、ルーアさまが行方不明のデビッタを搜索するために人間界に向かわれたのですね」

ミディアンはそう言って黙り込んだ。ルーアひとりでデビッタを搜索するのは厳しいという心配そうな顔をしていた。

「ミディアン、ルーアが心配なのか」

「はい」

ミディアンは頷きながら言った。

「心配するな、大丈夫だ」

ベリアルはミディアンを安心させるように言ったが、ミディアンは安心するどころか、ますます心配になってしまった。

「ベリアルさま、私もルーアさまと一緒にデビッタさまを搜索しに人間界に向かいます」

ミディアンはそう言って、ルーアの後を追おうとしたが、ベリアルに行く手を阻まれた。

「ミディアン、おまえは私とここにいろ」

「どうしてです！ ルーアさまに何かあったらどうなさるおつもりですか？」

「ルーアは私に勝るとも劣らない魔法力を持っているため、人間界の人間が敵う相手ではないと確信している。私はここ父上がいる城を守らなければならないため、おまえには一緒にここ父上がいる城を守って欲しい」

「し、しかし」

「ミディアン、おまえは私の言うことが聞けないのか！」

ベリアルは声を荒げて言った。

「滅相ありません！」

ミディアンは首を振りながら言い、ベリアルの言うことに従った。

(デビッタを見つけ出すわ)

魔界から人間界に移動したルーアがデビッタの搜索のため、森を歩いていると、背後から誰かに話しかけられた。

「魔界におられるサタンさまの子、ルーアさまがここ人間界に来られるとは思っていなかったですわね」

後ろを振り向くとピーターが立っていた。

ルーアはピーターと向き合おうと、

「ラット、魔界の四天王として、人間界の人間を殺しているか」

と確認するように言った。

「はい」

ピーターはミナキと戦い、魔王の洗脳が解け、人間界のために魔界と戦っているという隠し事をして、嘘をついた。ルーアから情報収集のため、魔界の情報を得るためであった。

「よし。おまえは人間界の人間だけど、魔界の四天王となったから、魔界のために人間を殺すのは当然」

「……」

ピーターは黙ってルーアを見つめたあと、

「ルーアさま、どうしてここ人間界に来られたのですか」

魔界にいるサタンの子、ルーアが人間界に来たのは、魔界で何かあったからではないかと思いい、理由を聞いた。

「父上が兄上にベルゼブルの魔剣を授けたものの、ブラックストーンを授ける者があとひとりいないため、このままでは聖剣アドラミティオンと戦えない」

「えっ、ブラックストーンを授ける者があとひとりいないとは？」

ピーターはてっきりベリアルはサタンからベルゼブルの魔剣を授かり、ミナキがラエティアから授かる聖剣アドラミティオンと戦えると思っていたので、驚きながらそう聞いた。

「行方不明になっている妹、デビッタよ」

「えっ！ デビッタさま？」

ピーターはデビッタを知らなかった。ピーターがベリアルによって、魔界に連れて来られ、魔界の四天王になった頃、デビッタは既に行方不明になっていて、魔界にいなかったからだ。

「デビッタがここ人間界にいると推測したから、デビッタを捜索するために来たの」

「行方不明のデビッタさまが見つければ、サタンさまからブラックストーンを授かる者が揃い、ベリアルさまはサタンさまから授かったベルゼブルの魔剣で聖剣アドラミティオンと戦えるということですね」

「そういうことよ」

「……」

ピーターは黙ったまま手にしていた弓を握り締めた。

「ラット、私はデビッタの捜索をするから、おまえは人間界の人間を殺すのよ」

そう言い残すと、ルーアはピーターに背を向けて立ち去った。

(ルーア、おめえにデビッタの捜索はさせねえよ)

ピーターは懐から妖魔の短剣を取り出し、ルーアに向けて弓を構えた。

「待て！」

とルーアを呼び止め、ルーアに向かって弓を引いて妖魔の短剣を離した。妖魔の短剣がルーア

に向かって飛んで行く。

ルーアが振り向くと、妖魔の短剣はルーアの胸に命中した。だが、妖魔の短剣はサタンが作り出した魔界の武器なので、サタンの子であるルーアに命中しても即死しないため、ルーアは即死しなかった。

「なっ！」

「妖魔の短剣で即死させようとしても無駄よ」

ルーアが胸に命中した妖魔の短剣を抜き、ピーターの足元に捨てると、ピーターは拾って、懐に入れた。

「おめえたちと戦うためにこいつは持っておかないとな」

「ラット、妖魔の短剣で私たちと戦うようだけど、妖魔の短剣は父上が作り出した魔界の武器なので、私たちに即死は効かないわよ」

ルーアは妖魔の短剣で魔界の魔族と戦うピーターの気持ちをそいだ。

「ラット、父上の洗脳が解けたのね。ならば、私が父上に代わり、おまえを洗脳するわ」

ルーアはピーターを洗脳しようとしたが、ピーターは洗脳されなかった。

「洗脳できないわ」

「俺はもうおめえたちに洗脳されない。おめえたちと戦う」

ピーターは魔界の魔族に逆らった。

「私たちに逆らうおまえを殺す」

ルーアはダークネスボールでピーターを攻撃したが、

「俺は魔界の魔族と戦う人間界の人間だ」

ピーターはアースショットで反撃した。

「ラット、やるじゃない。兄上が人間界の人間にしては、高い魔法力を持っているおまえを気に入ったわけね」

「ルーア、俺の名前はラットじゃねえ、ピーターだ。これから俺を呼ぶならピーターと呼びな」

「ええ、これからおまえを魔界の敵、人間界の人間と見て、ピーターと呼ぶわ。私の魔法力はこの程度ではない、これからおまえの魔法力との違いを見せてあげる」

「へっ、俺の魔法は妖魔の短剣を手にする事で能力が大幅に上がるんだぜ」

ピーターは手にしていた弓矢を地面に置き、懐から妖魔の短剣を取り出した。ピーターの魔法の能力が大幅に上がった。

「ふふっ」

ルーアは笑みを浮かべた。

「何を笑っている」

「おまえのことを笑っているのよ。おまえが妖魔の短剣を手することで魔法の能力が大幅に上がろうと、私には敵わない」

ルーアは魔法力を高めた。

「何っ！ ルーアの魔法力が俺の魔法力を上回るといふのか」

ルーアはダークネスアローでピーターを、ピーターはアースショットでルーアを攻撃し合った。ルーアの魔法力がピーターの魔法力を上回っているため、ルーアはピーターを追い詰めた。

「ルーア、おめえにここまで追い詰められるとはな……」

「ピーター、言ったでしょ。おまえが妖魔の短剣を手にすることで魔法の能力が大幅に上がろうと、私には敵わないと」

ルーアは後ずさりするピーターを追いかけた。

「ピーター、おまえはここで私に殺されるのよ」

（くっ、妖魔の短剣が役に立たない。このままではルーアにやられる。だが、俺は……）

ピーターは妖魔の短剣を構えた。

「私には敵わないとわかっていて、まだ私に刃向かうつもり？」

「ああ」

「無駄死にね」

ルーアがそう言うと、ピーターはミナキと再会の約束をしたことを思い出した。

（俺はミナキと再会するためにここでルーアに殺されるわけにはいかない）

ピーターは妖魔の短剣を懐に入れて、地面に置いた弓矢を拾うと、

「退くぞ」

と言って、撤退した。

「逃がさないわよ、ピーター」

ルーアは撤退するピーターに追い撃ちをかけようとしたが、行方不明のデビッタが見つからないと、サタンからブラックストーンを授かる者が揃わず、ベルゼブルの魔剣は闇の輝きを放つこととはないため、ベリアルが聖剣アドラミティオンと戦えないと思い、デビッタの搜索を優先し、先を急いだ。

「くっ、ルーアがデビッタを搜索するのを阻止できなかったか」

ピーターはルーアに敵わず、撤退したことに對して悔しさを滲ませながら、ルーアが行方不明のデビッタを搜索し、見つけてしまったら、サタンからブラックストーンを授かる者が揃い、ベリアルがサタンから授かったベルゼブルの魔剣で聖剣アドラミティオンと戦えるようになる。そうなる前にミナキがラエティアからナチュラルストーンを授かる者を揃えて、ラエティアから聖剣アドラミティオンを授からなくてはならないと思い、ルーアから得た魔界の情報をミナキに伝えるため、先を急いだ。

デビッタはキーナでジュンと名乗り、キナと暮らしていた。

魔界から人間界に迷い込んだデビツタは魔族の姿だったが、亡きじっちゃんに魔族の姿では他人に被害が出るので、人間の心を植え付け、人間の姿に変えられ、魔王に見つかからないように名前をジュンに変えられた。キナはジュンと遊ぶことが好きなジュンの友人である。ジュンがキーナの森で日課になっている修行を終え、キーナの村に戻ると、ジュンを「遊ぼうよ」と誘い、ジュンに肩車されて遊んでもらっている。

ジュンは姉の夢を見た。ルーアとリサがジュンの目の前に現れた。

「我が妹よ」

「私たちはおまえの姉だ」

「あんたたちは俺の姉さんか」

ジュンがルーアとリサに確認すると、ルーアとリサは頷いた。

「俺に姉がいる」

夢から覚めたジュンは幼い頃、ルーアとリサを姉だと知らず、魔界から人間界に迷い込み、人間界で育つたため、自分に姉がいることを知らなかったが、姉の夢を見たことで、自分に姉がいることを知った。

「姉さんに会いたい」

ジュンは生き別れた姉を捜す決意をした。

ジュンはキナに生き別れた姉に会うため捜すこと、修行の旅で今よりもっと強くなることを話

して聞かせ、

「姉さんを捜し求めて、修行の旅に出るよ」と言った。

「旅に出るのね、ジュン」

ジュンは頷いた。

「ジュンが旅に出ると、寂しくなるな」

キナは悲しそうな顔をしながら言った。

「そんな顔をするな、時々帰って来るからさ」

ジュンがそう言うと、キナは笑顔を見せた。

「ジュンを応援しているよ」

「頑張るよ、キナ」

ジュンは胸の前で拳を握った。

「じゃあね、ジュン。生き別れたお姉さんを見つけて、今よりもっと強くなってるね」

ジュンはキナに見送られて、キーナを出た。

魔界の魔族であるジュンは幼い頃、人間界に迷い込み、キーナの亡きじっちゃんに育てられたため、自分は人間界の人間だと思っている。人間界と戦うため、サタンからブラックストーンを授かる者だということを人間界が魔界と戦っていることを知らないジュンは今、知る由もない。



DESTINY PUPIL

著 者 アクア

イラスト まりも

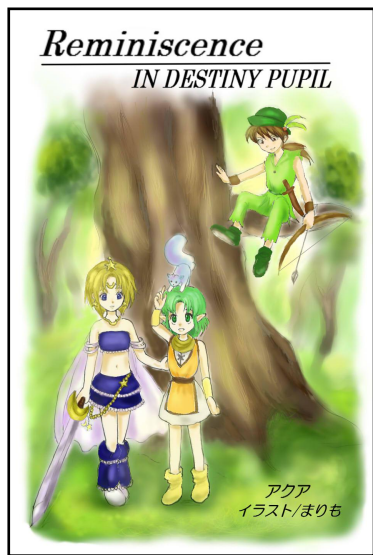
発行日 2018年9月4日

メー ル webaqua@iris.ocn.ne.jp

ウエ ブ <http://www.webaqua.server-shared.com/>

※無断転載・複製・複写・ウェブ上でのアップロード、
ネットオークション・フリマアプリでの転売禁止。

DESTINY PUPILの番外編（回想物語）。幼女期のミナキ・フィラデルフィアとおさなじみの物語。過去を思い出して。



DESTINY PUPIL の
番外編よ。
読んでね。

